

浄土

三月號



昭和十四年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十四年三月一日發行

第五卷 第三號

金

◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります。

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

講話

淨土信仰の眞髓は實にこの一文に盡く！

日本信仰史上に燦然と輝く法然上人の『一枚起請文』。この一文の中に籠る信仰の精神を知らずして、信仰の何々たるかを語るは潜越である。

この簡潔流麗なる語句の中に脈うつ深く豊かな宗教の眞理が當代隨一の名講義によつて、解り易く讀者の心に滲込んで行く！

枚

起

請

文

宗教講話に新生面を開いた名講義！

定 價 拾 三 錢
送 料 共

發 行 所

法然上人鑽仰會

振替……東京八二一八七

布教用書の
最高峰

彼岸の本に！

本會は特に淨土信仰普及のため左の如き犠牲的奉仕をなす

一度に十部以上
購入されば 一部當り 九錢 (送料不要)

寺院の布教用、工場會社等の修養讀物として、最適！



◇浄

土

第五卷
第三號

三月號

目次◇

表紙

鈴木金平

扉繪・目次カット

川村良孝

浄土教と現代

故渡邊海旭師

日支親善は童心から

柴田玄鳳 (一〇)

法然上人繪傳に就て

中島松二 (二六)

隨筆 太秦の觀音様

和田正系 (三)

浄き友の會 信仰座談

(四)

奈良田七不思議

篠原文雄 (四八)

短歌白

梅

抄

岩野喜久代 (四〇)

信

仰

相

談

中村辨康 (五三)

淺

春

雜

筆

武藤

叟 (五)



實話 馬吉の出世……………佐賀一海（三）

童話 わかれ……………瀬田彌太郎（四）

小説 指切小町……………小島健三（二四）

隨筆 淺春靜思……………吉田絃二郎（二六）

現地だより 前線の供養……………安田秀賢（二）

淨き友の會だより……………（四）

歌壇……………與謝野晶子選（七）

俳壇……………太田耳動子選（三）

日常勤行式 解説講讀 信仰への捷徑……………中村辨康（四）

會員の聲……………（六）

鑽仰運動ニュース……………（六）

編輯部だより……………（六）

◇淨土第三卷 三月號 目次◇

健康の安全地帯

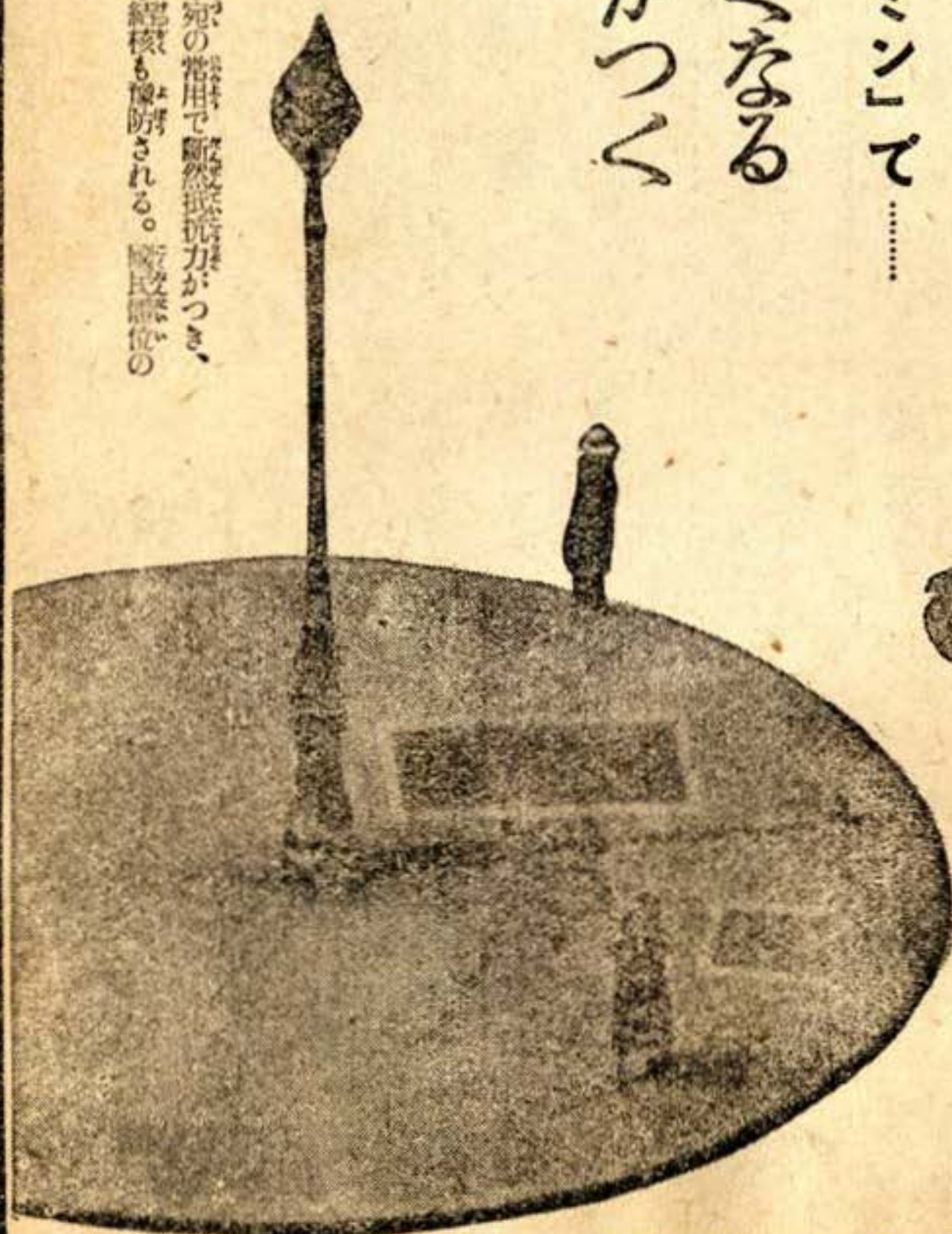
朝夕一球宛の

「理研ビタミン」で……

風邪をひかなくなる 結核を防ぐ力がつく

見よ！この力價！

理研ビタミンは純粹のビタミンAとDを服みよいグロビュール球に包んだ強力製品です。一球中に七七〇〇國際單位、すなはち鰵肝二十五分のビタミンAを含有し朝夕一球宛の常用で斷然抵抗力がつき、呼吸器が強化され、風邪をひかなくなり結核も預防される。國民體位の向上に理想的營養劑として推薦される。



理研ビタミン

(包裝)

四十球入 百球入
五百球入 千球入
婦人子供用小粒製品

五拾球入 一、三〇
百球入 二、五〇

淨土

三月號

若しこの光にあふものは、

三垢消滅して、身意柔順に、

歡喜踴躍して、善心生ぜん。

無量壽經





淨土教と現代

(終講)

故 渡 邊 海 旭 師

一、淨土教の佛教に於ける位置

- イ、空門に於て
- ロ、無我因縁に於て
- ハ、大智慧に對して
- ニ、理觀に對して

二、直 截 簡 易

第四に淨土教の特色とする點は、直截、明快、簡易なることである。淨土教は行住坐臥、何時も念佛と共に生きるのである、即ち各自の業務の中に念佛があるのである。特別な時間を限つて、坐つて修するのではなく、たゞそのまゝやればよい。かゝる上人の常念主義に對して佛教徒の賞讃するは勿論であるが、キリスト教徒もこれに感心し、永遠の生命は上人の教によつて完う出來ると云つた。實に現代の多忙なる業務の中にもこの念佛を行つてゆけるのである。精神を集中せしめ、頭腦を使ふやうな仕事も、この教によれば、最も適切に、明快到達することが出來るのである。即ち、そこでは殿堂伽藍が中心ではない、何處でも念佛が出來るのである。

又淨土教にはこれを導く高僧がなくてもよい。即ち僧俗の別がないのである。更に淨土教には規則がない、やかましい

二、現代思想と淨土教の特色

- イ、普遍の救済
- ロ、實行主義
- ハ、形式儀禮の徹廢 (以上前號掲載)
- ニ、直截簡易
- ホ、現代批判力(厭欣)



戒律がないのである。ある人が「淨土教を信仰するには魚肉を食ふてはならぬか」と問はれた時、上人は「魚肉を食ふことなど念佛に關係あるものでない、もしそれが關係あるとしたなら、鶴が救はれ狼が救はれるであらう」と云はれてゐる。そこでこれが其の時代の佛教界に問題となり、かゝる言は氣高い佛教を破壊するものであるとさへ云はれた。かの梅尾の明慧上人は高德の名僧であつたが、法然上人の選擇集などを攻撃してその大菩提心は凡夫に不要なりとの主張を非難されてゐる。然し上人の信仰やその言行から見て、その時代として何うしても上人が出られねばならなかつたのである。日蓮は身延の墓を中心とせよと云はれたが、上人は比叡や高野の如き遺跡は要らぬと云はれた。而して我は十惡の法然、愚惡の法然なりと云はれてゐる。勿論法然上人が然うではないが、自ら斯く語られてゐる所に強味がある。その賢愚貴賤の別なき所が尊いのである。

以上のやうな諸點は現代の諸方面に最も適した教である。要するに淨土教は生活に即せる宗教、實行、自由の宗教であり、その結論として、普遍の宗教である。即ち誰でも、惡人でも救はれる宗教である。我々の精神をよく見ると、或る時は慘忍な氣が出てゐる。又ある時は戦争して戦争を惡む感じも出てくる。又それ故敵も相當に愛せねばならないのである。がしかも左様にはゆかない。こゝが人間の弱點である。今回の事件も、事件そのものが日本の目的ではなくして、日支親善がその根本的である。それには救ひの教が無ければならない、淨土教はかゝる人間の弱點を考へたものである。我は十惡の法然房なり、愚痴の法然房なりと云ひ、我は烏帽子もととり得ざる人非人である、劣等なルンペンにも等しいと云はれてゐる。ここに淨土教の注意すべき點が存する。

ホ、現代批判力

同時に、淨土教は現代に對する強き批判力を有する。現代は不完全である、これを佛教では五濁惡世と云ふ。即ちそれは時代と思想と罪惡と社會と生活との濁を見るのである。

一、時代の濁（劫濁）社會がわるいため人の頭腦もよくない、そして發達せる科學の裏面にも罪惡がある。現代文化には種々なる人間の弱點を誘ふものがある。かくて科學の文化も時代の濁りを増すことが多いのである。

二、思想の濁（見濁）現今思想犯などと云はれ、思想は國家社會に對する危險なる者を醸成してゐる。又他方、奢侈



放逸黄金萬能と考へ違ひしてゐる者もある。今から三十年前の日本と今日の日本とはその思想上に於て全く比較にならない。或る官吏は、自分の子供が頭がよい爲めに危険に走り易いと云ふて心配し、その頭腦の悪からんことを希つてゐる。又名門の貴族子弟にて頭腦よきものは危険思想に走り易いと云ふ。かやうに一方險惡なる思想を抱いて社會の革命を考へ、又一方道德を亂し文藝を亂すものが見られる。

三、罪惡の濁（煩惱濁）今や科學も犯罪の道具とされるに至つたのは日本ばかりではない。米國もその著しきものである。米國第一主義を唱へて、富も建築も世界第一を誇つてゐるが、罪惡に於ても亦第一である。日本に於ても、その古い頃より現今に於ては遙かに慘酷なる罪惡が増加してゐる。二十四五年以前には北陸には本願寺宗旨が盛んに行はれてゐたが、今北陸には犯罪が多くなつた。

四、社會の濁（衆生濁）信仰なき社會は不安の中に慘めにも動搖がやまない。

五、生活の濁（命濁）即ちあらゆる相の生活苦である。

かやうにその慘めさを見來ると現代は誠に厭離すべきであることを感ずる。そこでこの濁りを超えた立派なものを認めねばならないのである。自分の親子や一村一國にこの五濁あることを認めて、これを批判するのである。その最も厳しく批判するのが大經の五惡段である。それは國家社會個人の罪惡を眺めたものである。即ち國家を亂し、兵を起し、正義なき戰をすることを非難したのである。

淨土教の普遍の救ひは何うしても現代に見極めねばならない。その濯れし者と共に沈むか、自分だけ失望落膽するか、その兩者とも不可か。否、信仰に巍然と立ち上ることが必要である。この濁惡なる世界に對して、純然たる無垢の理想世界ありとするならば、そこに淨土の信仰があるのである。とにかく淨土教は、よく眼をひらいて現在の世界を見よと教ふるのである。そこで淨土教は批判の立場から一面、厭離穢土を主張する。

徳川家康が三河に於て、織田信長の軍勢と戦つて敗れ、菩提所の大樹寺で割腹せんとした時、住職の登譽上人が其の短氣を戒めて保護したことがある。その時登譽上人は家康に對つて「この現代を見よ、強きものは弱きものを併せ、萬民を苦しめてゐる、それ故、御身こそは此の現代を統一して救ふべきである。淨土の信仰たる厭離穢土とは天下を平定する



ことにある」と云はれ、更にその指導方面には厭求淨土の必要なる所以を説き、その文字を書ける旅を興へた。家康はかくて、日課念佛を終生つとめ、紙面に名號を千も二千も書かれてゐた。公の亂世統一はこの信仰の感動によるものと云はれる。かゝることは現代にも望ましきことである。

これを前述の根本原理と合せて考へると次のやうになる。



即ち佛教の原理を淨土教では厭離穢土欣求淨土と云ふのである。この表で佛教と淨土教の關係が理解されると思ふ。然らば淨土教によると厭世的になるか。昔は濁惡の世間を離れやうとして遁世したものがある。西行などはその例である。かゝる悲觀は淨土教ではない。淨土教は歡喜踊躍の教である。墮落の中にも依然として進みうる強味がある。上人の弟子の中で上人に叛き迫害するものもあつた。然し上人はこれらに頓着なく明るく進まれた。自分の教に叛く敵者をも愛されたのである。又上人が七十五歳の老齡を以て流罪に問はれた時、しばし念佛を廢して罪を逃れよとの勧めも退けて、遠國流刑も遍地の教化のためと寵恩を有難み、死罪にも處せられず流罪の恩典を受けて、歡喜圓滿、何等の不平不満なく進み赴かれてゐる。大經に「若しこの光に遭ふ者は三垢消滅して身意柔軟なり、歡喜踊躍して善心生ぜん」とある。この光に遭ふとは淨土教の信仰を得て救はれた有様である。暗き心の中に一道の光りが射して明るくなつたことである。三垢消滅とは貪瞋癡の垢のとれたこと、人々の心身が固く凝つてゐるのが軟かになつて喜び勇んだこと。これが淨土教の信仰状態で、念佛に歡喜踊躍する有様である。淨土教は實行的であり普遍的であり、すべての形式を離れ、簡明直截なる所に



優れた價值がある。常に歡び勇む教であり、上人の一生も亦これを以て貫かれてゐる。我等は如何なる悲運にあつても斯の光りに遭ひ、假令自らの生命を斷たるともこの歡びをもつて進むことが大切である。かくしてこそ苦惱の現状に同情の力が涌き出づるのである。

又、淨土教の欣求淨土は未來主義であり、現代の社會を顧みず非國家非社會主義であるか。否、淨土教の根本は念佛生活である。その意味は善の實現することである。現在の倫理も道德も乃至國家の目的も法律の目的も齊しく善の實現である。これ王道たり仁義の道たるものである。孔子も孟子も西哲も皆これを主張した。それは念佛生活を云ふものである。誰もが求める最高理想の實現は其の全生活が念佛生活となればよいのである。

淨土教の云ふ厭離穢土とは、無宗教、無信仰、無道德の社會を惡しとして厭離するのである。即ち念佛生活が無いから穢土なのである。上人は念佛申されるやりにすれば何してもよい、即ち、善の實現する生活の根本が現はされるならば資本家でも労働者でも何でもよい、と云はれてゐる。従つて念佛生活には經濟も國防も必要である。滿蒙に國家が現はれたが、そこには王道が必要である、徳教が必要である、宗教尊重の觀念があれば必ず王道の國家が出来る。滿蒙では古來、元も明も清も、その名主が皆宗教を尊重して來た。故に今こゝに仁義の教を布いて確立すればよい、佛教でも喇嘛教でも儒教でも皆尊重せねばならない、それが國家の根本となる。徳教、道德の尊重が必要であつて、この最高理想を國家とすべきである。現在の日本も、更に進んで教育、社會の組織の完全を期することが必要である。故に念佛生活の上に國家の善を實現せしめることが大切である。かくて念佛と生活の關係の最も必要なることを知るのである。

大經に「天下和順、日月清明、風雨以時、災厲不起、國富民安、兵戈無用、修徳興食、務修禮讓」とある。聖徳太子十七條憲法にも「和を以て貴しとなす」とある。和順とは憲法である。人の心が立派であれば日月も清らかである。科學學術の進歩によつて風雨も時を以てすることが出来る。兵も已むを得ず用ゆるのであつて、成るべく早く休めねばならぬ。禮讓は國際文化の關係に必要なことであり、精神的愛敬である。我等は天長節や紀元節には常にこの文を唱へて天壽の萬歳を唱ふるのである。その根本は即ち念佛である。それ故淨土教のもつ觀念は國家を無視するやうなものではない、國家に對する最も強き力を有つてゐるものである。



敵 前 の 供 養

〇〇部隊 安 田 秀 賢

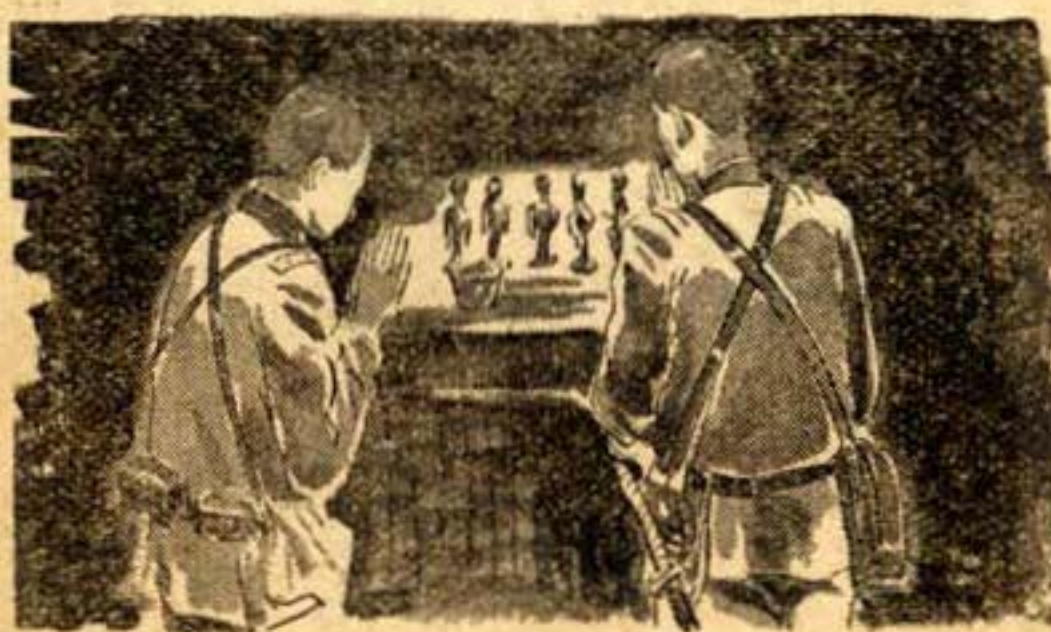
昨夜から今朝の八時にかけて銃前哨勤務を了へて小隊に歸つてくると、本隊から連絡員が四名到着してゐた。私達は本隊から〇里離れた中央第一線に警備してゐるので、本隊からは一週間に一度、内地からの書簡その他の連絡に來ることになつてゐる。

私は小隊に歸つて小隊長殿の部屋をノックして昨夜の敵の襲撃模様を報告し終つて、フツ机の上を見ると一通の手紙が開封しておいてあつた。そして小隊長殿のお顔色も何

となく悲痛味をおびておられたので『何か變つたことでも通知がありましたか』とお聞きすると『困つた事が出来てね』

と語られるところによると、實兄の嫂さんが三つと五つの二人のお子さんを殘されて三十一の若さで亡くなられたとの事。私は何か知らん、愁然としてお慰めする言葉もない。

やがて戦線に夜が來て、私は再び小隊長殿の部屋に入ると眞闇の中にチロチロと焚火の光が赤く燃えてその前に撫然と小隊長があたつておられる。



『亡くなられた方の爲めにお經を讀まして戴きませう。』『有難う、ではあの御佛像を出してもらうか』それは過ぐる南京戦

闘の時路上に轉がつてゐた小さな六體の金佛像を、これは勿體ないと小隊長が、行李深く藏されてゐたものだ。

部屋の棚の上にお佛像をおまつりしてお燈明をあげ夜の肅然とした風に吹かれてゐた山花を折つて供へ、日常勤行式と法然上人の登山狀を誦し終る。この有難い因縁に自づと涙がこぼれた。

やがて小隊長殿と私の二人は淨土教に就いてしみじみと語つた。

十二時を過ぎる頃に敵の銃聲はボンボンと近づいて來た。『來ましたね』靜かに私が云ふと『來たッ、さあ行かう』

悲しみにわだかまる胸を拂ひのけるやうにして立ち上つた二人は、外に走り出た。

暗い夜、風は吹いてゐた。陣地へ走る軍靴の音がいつか〇〇名になつてゐる。



なつかしい

太秦の觀音様

醫學博士

和田正系

昭和十四年一月二十五日。

原田靈道先生が突如として急逝せられた。

私の、直接、先生から御交際を頂いたのは極めて短い時間でしかなかったが感慨は深いのである。御高名はかねがね承つて居たので、一度お眼にかゝれたらと願つて居たのであるが、實際に御面會出来たのは去年の夏であつた。先生は奥様や御子様をお連れになつて淑徳高等女學校の臨海寮にお出でになつた。二人の御子様は百日咳を患つて居られて、私は診療の御依頼を受けたのであるが、先生が私如き者の名を、い

つか知つて居て下すつたのには深く感激したのであつた。初めてのお話は興深く續いて時間の經つのも分らなかつた。その昔、先生が譯された華嚴經は私も持つて居るので、その時分のお話は殊に面白かつた。おつかる御子様をおん負して態々玄關まで送つて下すつた、先生の子供の如く無邪氣な笑顔は今も尙私の眼底に刻まれて忘れることが出来ない。その後二三回お眼にかゝることが出来たが、先生のあの童顔童心、少しの飾り氣も無い素晴らしきには、私はつくづく感嘆して、よく妻に語つたものであつた。今年の夏はまたお出でになることゝ樂

しんで居たのに、新年草々、この悲しい御通知を頂くとは本當に夢にも思はなかつたのである。

今年は、正月草々から、近所の親しい人の急死に會つて、深く感動させられた。僅か一分前迄は何事も無かつたその人は、突發事に逢つて忽ち亡骸と變り果てゝ了つた。飛んで往診したが間に合はなかつた。

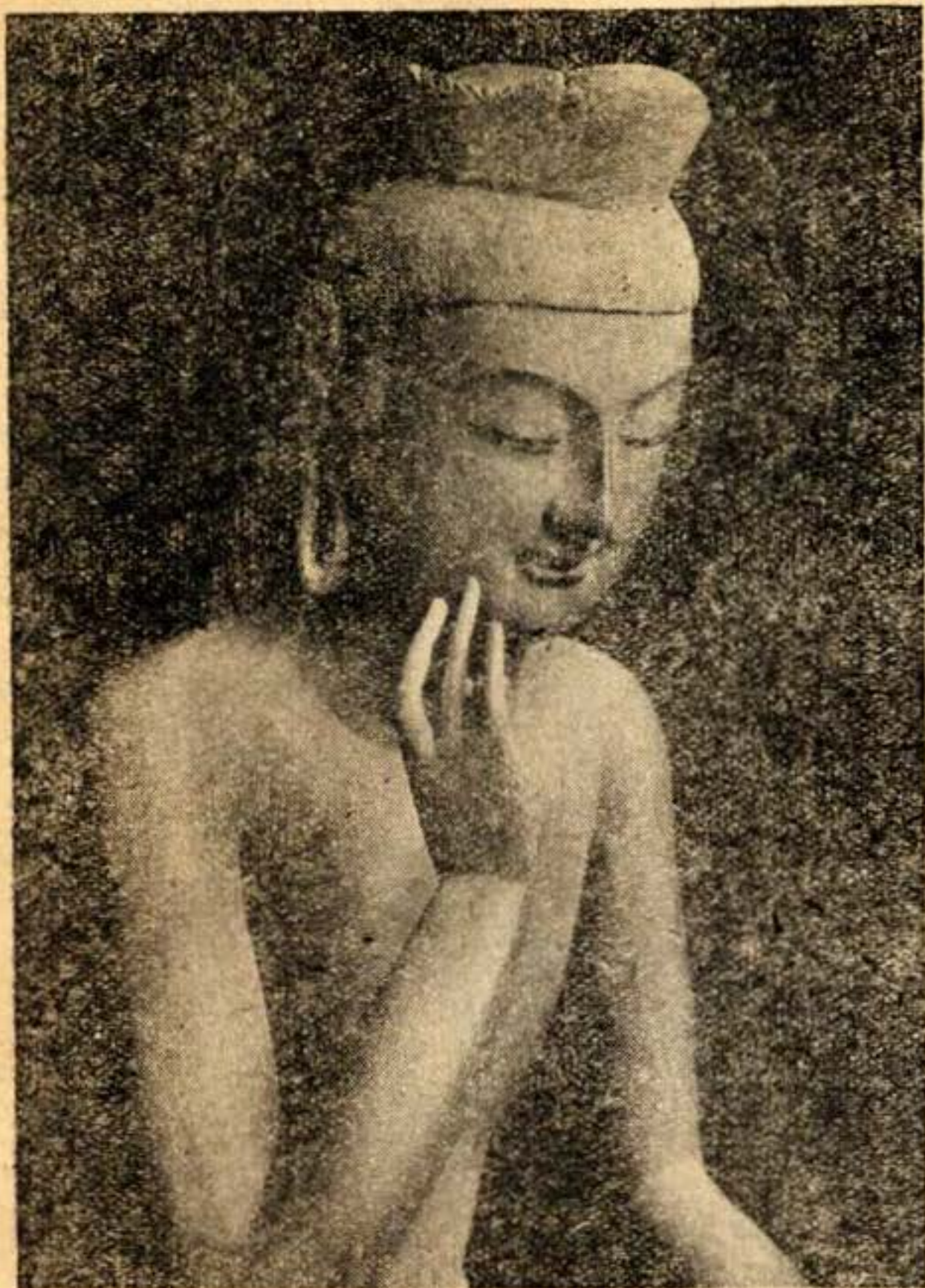
「人の命は食事の時、むせて死する事も有なり。南無阿彌陀佛とかみ、南無阿彌陀佛とのみ入べきなり。」といふ法然上人のお言葉がこの時程ひしひしと身に沁みた事はなかつた。

先生の御葬儀は廿九日小石川の傳通院で行はれた。私も房州の片田舎から出かけて末席に連つたのである。

この廿九日は私にとつて何といふ佛縁の深い日であつたらう。それは更に傳通院からの歸りに、思ひがけなくも、實に思ひがけなくも、私に始めて、佛の道を指したものであつた。今年のお眼にかゝれたからである。

京都太秦の廣隆寺の觀音様にお逢ひ出来たからである。(寫眞は廣隆寺の觀音様)

その日、時間が少し餘つたので、私はこの貴重な機会に新しい博物館へ始めて訪れたのであつた。時間が無いので、私は豫てから憶れてゐた、御物の四十八體佛だけで



も拜んで歸りたいと思つたからである。新しい博物館は素晴らしく立派だつた。私は玄關から直ちに正面の特別第五室に足を入れた。向つて右の入口からである。硝子の箱に安置された所の、私共の祖先の信仰の對象は一つと雖も感嘆に値しないものはなか

つた。一巡して最後の箱に近づいた時、私は、思はず大聲を立てやうとして、あわてゝ口を噤んだのである。見よ。そこには私が夢にも忘れぬ廣隆寺の觀音様が居られるではないか。私は一時驚きの餘り立ちすくんで了つたが、それに違ひないことが分ると、急いで近寄つた。廣隆寺の觀音様だ、太秦の觀音様だ。私は親にめぐり合つた子のやうに喜んで「觀音様、觀音様。」と口の中であやめながらその箱の周圍を廻つた。私はもう十何年の昔、京都に旅した時、ゆくりなくも太秦に參つてこの觀音様を始めて拜んだ。言語に絶したその慈悲のお姿に打たれて、私は始めて佛教といふものに心を向けるやうになつたのである。去年の春はこの觀音様をおがみたい許りに京都へ出かけた。その時の事を私は或る雜誌に次のやうに書いたのである。

「京都への憧れも久しいものだつた。歴史に富み、古い美術に満ちたこの昔の都は自然の美と相俟つて、古へに憧れる吾等の

心を魅さないではおかなかつた。名所舊蹟を訪れて懷古の情を恣にすることも勿論楽しいことではあるが、この頃私が頻りに京都を戀しがるのは他に理由があるのである。それは廣隆寺の如意輪觀音様であつた。今から十年の昔、醫學會に出席の爲め、大阪へ旅行した時であつた。ふとした機會で廣隆寺の觀音様にお詣りして深く魂を揺り動かされたのである。宗教には全く無關心で、況んや佛教の信仰などは毛ほども無かつた私であるから態々お詣りしたのでは無かつた。唯古い美術を見るのが目的で、それも特別の理由があつたのは無かつたけれども、聖德太子が自ら刻れたと傳へる、この如意輪觀音様には全く魂を底の底から動かされて了つたのであつた。宗教的には何も分らぬ私であつたが、この觀音様の前では理屈なく涙が流れた。どうしてそいふ氣持になつたか分らない。が、唯々その慈悲に満ち溢れたお顔を仰いだだけで私の心は有難さにふるへるのであつた。そして

其故かこの時程しみじみと亡き父母の慈愛を思ひ出したことは無かつた。私の心はしめやかな嬉しさに溢れてゐた。その時から私は佛の教へを知りたいと願ふやうになつたのである。そして、いつか私の心は法然房源空上人に向つて行つた。暖い春の光のやうな上人の教へは、かたくなに私の胸をも人並み近くして下すつたかと思ふ。私は今一度、京都に行つて、ゆかり深い、あの太秦の觀音様に參詣し、また知恩院の法然上人の墓前に佛恩を謝したいと念願するやうになつた。

十年を経て遂にその機會は來た。……こんな風にその紀行文は始まつて居る。靜まり返つた廣隆寺の境内を、案内の老爺に導かれて寶物館の方へ歩んだ、あの町の感慨は今も尙忘れられることは出来ない。雜木林のまばらな枝々は、うす寒い早春の空に忙しくさし交してゐた。

「……この觀音様は云はゞ私の心の眼を開けて下すつたのである。人にも常に語り、

自分ではいつも忘れぬ廣隆寺の觀音様である。長い間戀ひ慕つてゐた、この觀音様に今日再びおめにかゝることが出來た。十年の間には自分の身にも多くの變化があつた。友人にも親戚にも死んだ者が何人もある。それらの人々に比べて、丈夫でもない自分だつたが、幸にも今日まで無事で、かうして再びこの觀音様の前に來ることが出來たのだ。家族、友人、親戚、先輩、境遇——なに一つとして自分ほど恵まれてゐる者は無いと思ふ。

『生れ難き人界に生れ、遇ひ難き佛法に遇へり……』と法然上人は歡喜されたが、その悦びはそのまゝに、今の我が身の上なのであつた。……

その觀音様であつた。まがふこと無き廣隆寺の觀音様が今、東京の博物館の、この私の眼前に居られるのではないか。お寺ならば遙か遠く離れた所で無くては拜めないのに、今は硝子一枚を隔て、直ぐ眼の前に在るのである。餘りに勿體ない。

像は推古佛獨特の樟の一本造りである。

殆んど等身大、榻上に半跏して、左手を右足首に置き、右手は右膝に臂ついで、やゝうつむかれた頬に二本の指をあて、微笑されて居る。彌勒菩薩といふ方が正しいのであるが、古來この形を如意輪觀音と呼んで居る。私にとつて名は何れでも良いが、然し矢張り親しみの深い觀音様にしておきたいのである。この觀音様の美しさは度々拙い文章にも書いたが、實に人間の言語に絶してゐる。切れ長な眼、引緊つた鼻、愛らしい口元、豊かな頬。その頬に當てられた二本の指、手。何といふ美しさであらう。いや、それは美しいとか端麗とか莊嚴とかいふ人間の言葉で現はすには餘りに複雑な内容を持つてゐるのである。それは人間の形をして、人間では無い。汚れた地上には絶對に有り得ぬ美しさである。けれども亦人間の汚れも棄て給はぬ美しさである。人間に深い親しみをもたせる美しさである。佛の慈悲といふものを假りに人間の姿を以

て現はすとしたならば、恐らくこれより他に有るまいと思はれる。この像が傑作と推賞されるのは餘りにも當然である。

傳説によれば、この像は聖德太子御自ら刻まれて、御信任の厚かつた秦の河勝に賜つたといふ。河勝は之を今の太秦の地に寺を建て、祭つた。これが蜂岡寺で即ち今の廣隆寺であるといふ。この傳説は恐らく眞に近いであらうと思ふ。それは何よりもこの像の様式が太子時代の特徴を具へてゐるからである。この像に非常によく似た觀音様として名高いのは法隆寺のすぐお隣にある、中宮寺の本尊である。中宮寺は太子が御母君の御冥福を祈られる爲めに建立された尼寺で、その本尊は様式上、廣隆寺の觀音様より製作年代がやゝ下ると史家から云はれて居るのである。中宮寺の觀音様の方が一般には名高いが、私はこの廣隆寺の觀音様の方が好きである。兎に角、恐らく、否、殆んど確かに上宮太子はこの觀音様を拜まれたに違ひない。今から一千三百年の

昔、飛鳥の宮殿に太子が禮拜し給うた靈像を、今日計らずも足をも勞せず、東京の眞中に拜まれるといふことは何といふ有がたいことであらうか。

私は涙の溢れるのを止めることが出来なかつた。私は大聲を擧げて、廣い一室の人々に、この觀音様の有がたさとこの感激とを演説したい衝動に驅られた。先刻、原田先生の御靈前で拜んだ珠數はポケットにあつた。私はそれを手にかけて、この靈像の前に心から頭を垂れた。日曜で難路した見物人の中には私の舉動を怪しんだ人も有つたであらう。

今日、原田先生の御葬儀に上京しなかつたら、恐つく、この懷しく、有がたい觀音様におめにかゝれなかつたであらう。私はそこに眼に見へぬ因縁の絆を深く感じたのである。原田先生——觀音様——聖德太子——法然上人——と心の中で思ひ出の糸を手繰りながら、私は夕ぐれの上野の山を下つたのであつた。(終)

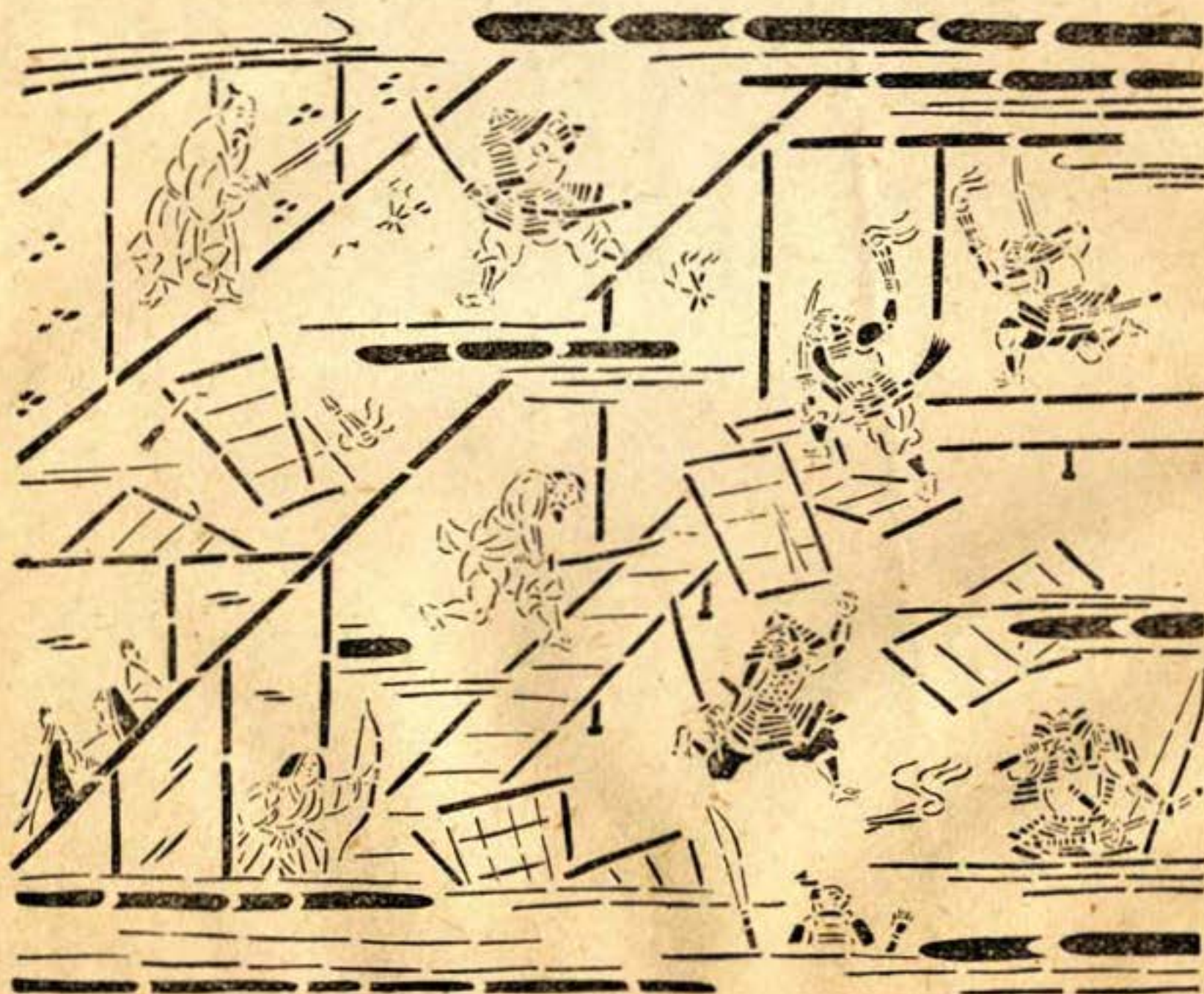
法然上人繪傳に就て

(芹澤銑介氏作合羽刷)

中 島 松 二

この繪傳の原作は、最初舊藏その下繪の大部を先きに見、その後日本民藝館に於て十數點の試作に接したのでした。此時には知恩院其他からも數多の佛教古版畫など優作が陳列されて居りましたが、それ等にも勝る出來榮えであつたのです。が、愈來る四月全卷五十餘葉の完成爲り、知恩院昭和版としてまみえる事になりました。けだし近頃の快事と切に思ふのであります。吾々は永く古畫又は古版畫を指いてかゝる作品の粹に接し得る事まことに尠く、而も相等部數制作さるる藝術作品に依つて宗教上の崇敬、信仰の隨喜に浸る事まれと謂つても過言でない有様でしたから、久瀧の渴を醫する想ひであり、果然その時機を得たるものと信じてやみません。

由來緣起物傳記物を美術上表現する仕事は非常な困難なるものであり、その構成、移行に就いては内容の深い洞察と明敏なる把握が必要とされ、其の重點を優秀なる藝能に倚つて具現しなければ革新

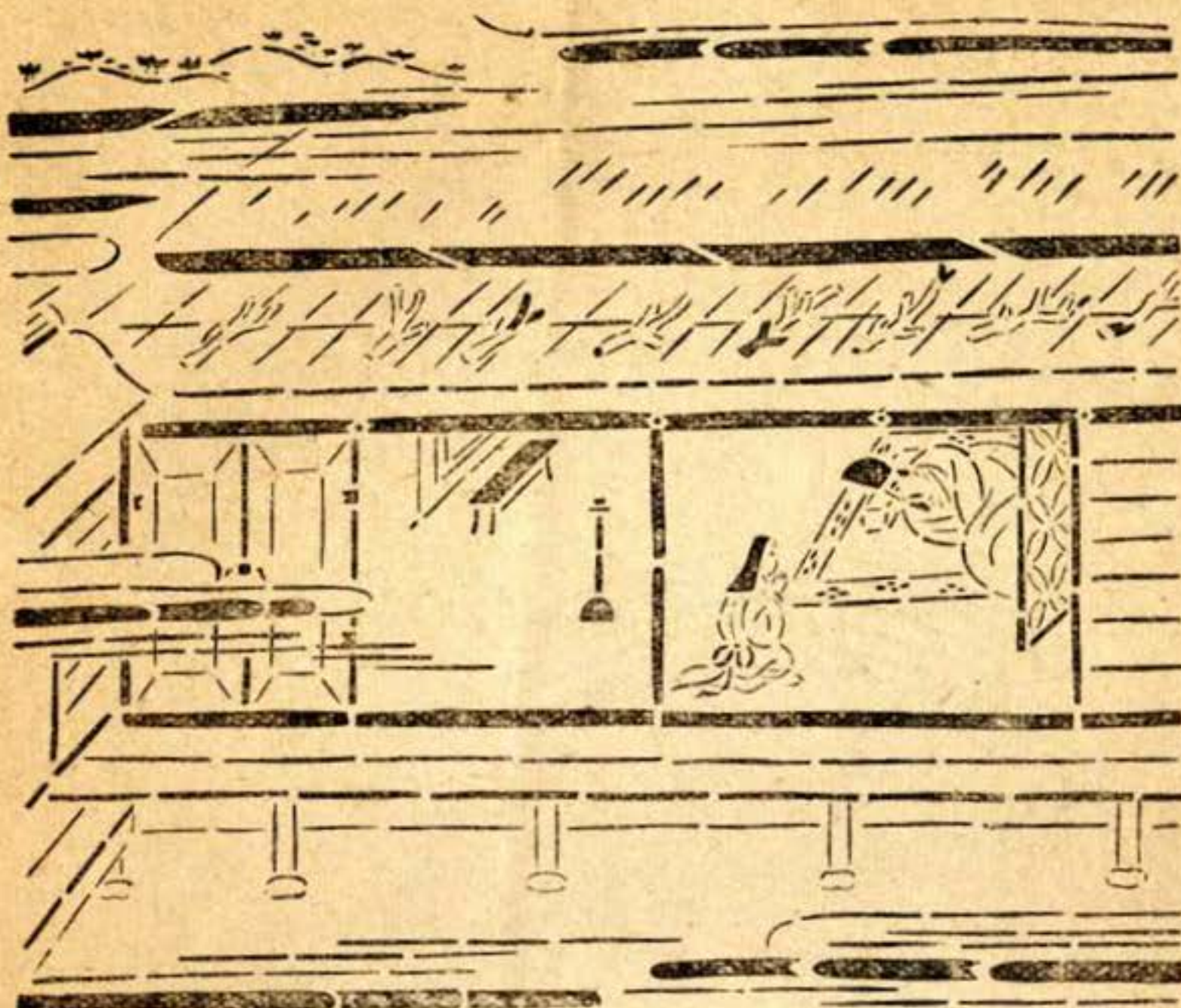


(美 一 定 明 の 二 夜 秘 伝)
保元七年 春

「五」時國の死

やう

故人をうらむる事なれども、或言後を
いふらむべからざるを求めんにはし



的所産は成されないものであります。

而もやゝもすればそこには傳統からさへも見離された不幸なる隔絶があるばかりです、そして宗教的香りなどはそれこそ消し飛んでしまひます。

作者はこの點に充分なる用意と一方ならぬ努力を拂つてをるのが認められるのです。その上この繪傳は、合羽刷即型繪と云ふ形式で表現されたものですから頗る様式上の制約を受けてをり異常な苦心を要されたであらうと思はれます。がかゝる難點を立派に征服した作者の藝術は實に堂々たるものです。先きに私は嘗て氏が米國ケラー氏の爲に制作された力作「ドンキホーテ」を知つてをり、再見したのでしたが、只今見るところでは、それにもまして結構な成果

をあげてをるのを感じました。作者の夢想的、飛躍活動的なに對蹠的な表現を以つてし、その線彫、刷に於ては數段の輝きを益すに至つてをります。ここに挿入しました四點は版にとりまします關係で筆彩が入つてをりませんが、原作には一葉毎に皆絶妙なる手彩色がほどこされて居ります。而て從來しばしば見らるる處の繪傳物と違つて單に、傳記の事柄の寫生のみでなく、時代的變遷移行を隨處に表現し人物、自然の性格、心理を描き出すに心憎いまでの適切性を持たした事です。ですから宗教的迫力を法悦の境地に觀る者をしてぐんぐん引込むのです。決して偶然の成果でない、作者の眞骨頂の呼吸の波打つてゐる制作態度が看取されるのです。

こゝに掲げましたのは



「定明の夜襲」

「時國の死」

「頭光踏蓮」

第五十二「明石大門」

の四葉で試作としてこの他に

第三「勢至丸誕生」

第七「登壇戒受」

第十一「諸山遊歴」

第六「秦氏と別る」

第九「釋迦堂參詣」

などが發表されたものです。

この繪傳は、彼の「勅修御傳」

を基本としてその正鵠を期し、熱

烈たる氣魄と純粹な感情との結合

に依つて、成し遂げられたもので

あります。而して素材を愛する氏

の心持が制作活動に、愈々藝術性

を深めて入つたのでした。この素

晴しい完成はこゝに全く古典を新

しい意味に於て出現させたものと

なり、又これこそ戰に、知識や技
術的藝術のみの問題でなく作者自
身の盡きない源泉から滾々として
湧き出づる信仰的創作熱意のほと
ぼしりに倚るものである事を私は
痛感したのです。

用紙には駿河の清瀨紙を用ひ手

彩色には、朱、丹、緑青、雌黄、

黄土、藍などが筆彩され、油煙墨

の墨調と相まつて滋味勝ちの中に

明るさの差した感じを受けます。

而して一葉毎に上人の語を挿入し

畫帖仕立になり、左右一尺七寸天

地一尺三寸の型です。用紙の美し

さ、線彫の巧、賦彩の落付き、畫

構成の妙は又筆で表せない型繪の

極地を行つて居ると評せませう。

線彫の溫雅な上品さは頭光踏蓮や

明石大門に見事に光り輝いて居り

ます、人物の姿體、容貌など難事

の彫線をすつかり濃過し切つて現

され背景天地の境界を、あらゆる様式の線調を以つて生かしたあたり、流石に氏の非凡なる力量を雄辯に物語つてをります。扱、この製作に就いては先きに往生寺法然上人像の刊行をされた明石市無量光寺住職小川龍彦師の發起にかゝるもので、前述の「ドンキホーテ」型繪によつてこの上人繪傳の發願を立てられたと云ふ事です。而して上梓に當つては、望月信亨師はその成果の依つて來つた作者の努力に深い感謝を拂はれて居ります。此様な製作は一朝一夕で生れるものでない事を切に感じたのでした。

この繪傳と同時に上人の御影も製作されたのです、

會に出陳されたものは型染をもつて麻地紬に單色墨又藍及び數彩の堂々たる美しいものでした、珠

數を持たれた蓮華上の上人は今にもその慈顔のほころびるやの思ひに誘ひます。昭和の御影として又と得難いものと考へます。

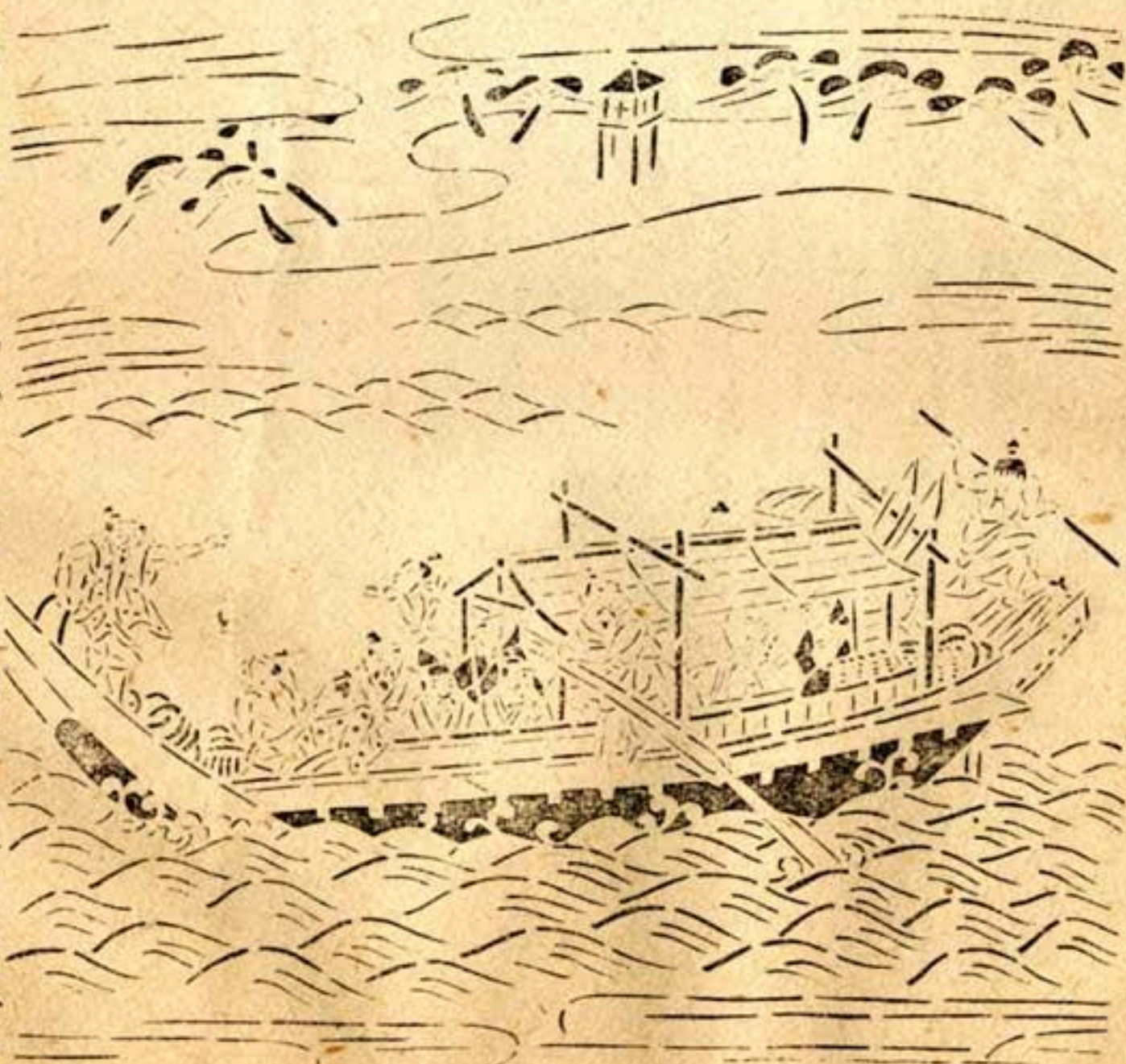
申す迄もなく藝術は我々生活の一員であり我々の、祖先から現在、そして未來への環である事です。こゝでこの繪傳に用ひられた用紙の手漉と云ひ油煙墨と云ひ、顔料と云ひ夫々野性を陶冶した所産であり純粹の血の通つた品々である事も又嬉しい事に思ひます、而して恐らく畫帖の装幀の美しさにも氏の藝術から内容と同様に教へられるもののあるのを期して待ちます。

以上至つて簡單ではありますが畏友芹澤氏の近業繪傳をこゝに御紹介致す因縁を有難く感ずる次第です。

(完)

（イ）六十二 明石大門

（ウ）七十三



彼れは目の敵にして大海を渡りては
六欲四利の神天来りて同じく汲みよは
伝心の手にて疑待の難きを汲まば
恒沙の怖怖来りて興へ給ふべし



日支親善は童心から

淨土宗知恩院
北支那教監

柴田玄風

一部の日本人の間には支那人を討るのに特別な定規が必要であるやうに考へてゐる人達があるやうだ。尤も悠久な歴史と傳統とを背負込んでゐる支那の國民には、その背負込んだ荷物の重さで外面的に歪められてゐるところは確かにある。然しこの歪められた假を剥ぎとつて見れば、そこに現はれて來るのは矢張り共通な人間性である。そしてその赤裸な人間としては日支人の間に何んの隔りもある譯のものではないから、かゝる態度で日支人が手を握り合ふ様にすることが宣撫工作の要訣ではないかと思ふのである。

私が宗命を帯びて北京に赴いたのは昨年の四月であつた。

淨土宗知恩院別院の北京及び天津別院の主任として布教活動を續けておつたのであるが、間もなく石家莊が繁榮して日支人で彼地に居住するものがふへて來た。そこで私は早速石家莊へ行つて布教所を作つた。

普通の家を借りて布教所にあてるのであるから、本堂その他の寺院としての色々な設備をととのへるのが相當骨の折れる仕事である。それでも種々奔走し

た結果、六月一つばいで一通りの設備が出来上つたので七月には各地の布教所、寺院などと一緒にうら盆法要を行ふことが出来た。

そこで夏に一度内地に歸還してから九月再渡支、彼岸法要をすませていよいよ各種の事業を開始することになった。

その時私は考へたのであるが、支那人に對しては誠意と辛抱強さを以つて接して行かねばならない、それには幼い子供達から親日的に教育して行くと云ふことは非常に意義のあることである。そこで石家莊では小學校を開かうと云ふことになった。

尤もそれ以前に天津では領事館の許可を得て日華語學校を開いたが、そこでは支那人に日本語、日本人の希望者に支那語を教へてゐる。現在では日支人併せて三十五六名になつてゐる。續いて北京でも領事館の許可を得て十一月十六日から同様に日華語學校の日語科、十二月一日から華語科を開設した。日語科は大野隆信君、華語科は成田昌信君が主任をやつてをり、私が校長と云ふ譯八十餘名の

學生を收容してゐる。更に北京では近く幼稚園を開く豫定で京都から久保マス女史が主任保母として赴任し目下支那語の學習をやつてゐる。今年の四五月頃には開園の運びにならうが、日本人の手で支那人相手に幼稚園を開くのはこれが始めてである。

そんな譯で石家莊(元來この石家莊と云ふ名稱は通稱で石門市と稱するのが本當である。人口は支那人が約五萬、日本人が約六千ある)では昨年の十一月一日から小學校を開いた。淨土宗立知恩學園と云ふのがその名稱である。

ところで、この石家莊に於ける教育設備たるや頗る不完全なもので、それだけの人口に對して市立の小學校が四つはよいとしても、第一から第三小學校までは男兒のみを收容しておつて、兒童數は計三百五十名位、第四は女兒のみで約百名。その他私立の小學校が十五六もあるがいづれも寺小屋式のもので、廿名から七十名位の兒童を收容してゐるのだから、それらを全部合計しても千名に足らぬ有

様である。その位の市になれば少くも三千名以上の學齡兒童がある筈なのだから、學齡兒童の約三分の二は就學してゐないと云ふ斷定になる。その上貧困者が多くて制服、學用品、教科書なども買へないものが多いと云ふ有様である。

従つて貧困兒童を收容することが急務であつて、石家莊の布教所は幸ひ街はづれの所謂貧民部落近いので貧困兒童收容には極めて都合が良い。

そこで知恩學園の園長には私が、學監には秦光道君が就任し、汪惠英と云ふ中國人が教務主任でやつて行くと云ふことで準備を進めてゐると、同地の啓蒙改良小學校の校長の田某郷と云ふ人が學園に併入を申込んで來たので、それをも併せて開校することになり、その筋へ出願した處が、領事館でも軍部でも大いに賛成せられて、宣撫班の方から教科書を支給してくれるし、宣撫班員の中から教育に經驗のあるものを毎日二名づゝ派遣して援助してくれることになった。そこで準備萬端

整つて開校したのが十一月一日であつた。

目下の收容兒童は四十五六名であるが、勿論月謝などはとらず、筆、墨、教科書などの學用品もこちらから給與してゐると云ふ譯で、この學園の開設はこの地方では非常に喜ばれて、私や秦君などが街を歩いてゐると行く先き／＼で幾人もの支那人が向ふから挨拶して來ると云ふ風である。將來の發展性が大いにあるのである。學園では淨土宗の信仰に立脚し「共和、進取、公益」を園訓として毎朝本尊佛の前で全生徒の朝禮を行つてゐる。

この布教所と小學校開設の影響として次の様なエピソードがある。

昨年十一月中のこと、石家莊布教所でお賽錢を盗まれたことがあつた。金額は僅かであるが、どうも學園の兒童の所作らしく甚だ面白くないから、擔任教師の手で探した處が、直ぐに犯人が擧つた。果して學園の一兒童がやつたことであるが、その事件の翌日、その子の父親が布教所へあやまりに來て、額を地

にすりつけんばかりにして詫を云つた上に、盗んだ金の外に一圓の金を差出した。いや、そう云ふ金は受取れないと云つて聞かせてもどうしても取つてくれと云つてきかない。阿彌陀様に對して子供がさう云ふ罪を犯して何んとも申譯がない。どうかこれで阿彌陀様にお詫びを云つて呉れと云ふのである。阿彌陀様に申譯がないと云ふことを心から感じてゐるらしいその様子には深く心を撃たれるものがあつた。

支那人は一體に相手の氣心がわかると非常な親しみと信頼とを有つて交際する風があつて、吾々日本人に對しても同様に誠意を以つてつき合つて行くに従つて漸次親しんで來た。

私が石家莊に出張するたびに布教所の家主さんや隣家の人達が私を招待して晚餐會を開いてくれるが、その時は一家總出でもてなしてくれ。そのもてなしぶりが、決して通り一邊の形式的なものでなく、腹の底から打解

けて來て下へも置かず待遇してくれる。

かう云ふ風に支那人は一見とり付きにくい様であるが、一端人を信ずると全く胸襟を開いて打解けてくるやうになる。然しそうなるまでには餘程辛棒が要る。兎に角廣漠たる土地に澤山の人間が住んでゐるのだから、日本の宣撫工作なるものも短日月で目立つた實績を擧げると云ふことは困難なことに違ひない。然し、要は誠意と忍耐である。それさへ飲み込んでおれば必ず成功する。

さう云ふ意味で、吾々が支那に小學校を開き、幼稚園を作つて、幼い子供達から正しい人間を作るために、本當の日本人を知らせるために教育して行くことは仲々意義のあることと信じてゐる。つまり日支親善は童心から、——千年の大計を立て、じつくりと腰をすえてかゝることである。

私の支那での體驗はこれに盡きないが、紙面の都合上、またの報告に譲ることにする。

(眞寫は知恩學園の生徒及び職員)



短歌

與謝野晶子

京都市 永田 七郎
嬉しさよ老い給へれど母上の健かにして家に居たまふ

評 感情の流露した素直な歌である。作者と共に讀者もほほえましく暖い心地がする。

朝鮮 權龍 球磨藏
妻は死にわれまた病みぬ三人ある子の上悲しいかになる身ぞ

評 悲痛な作であるお氣の毒に堪へない

東京市 三浦 禎子
ますらをに文かく時は火をはなれ衣にむかひて襟正すかな

評 前線將兵の勞苦に對しかくも深く感謝をささげ思ひを寄せる饒後の人でありたい。

千葉縣 高橋 美矢子
山寺の裏につづきて梅咲けど見る人あらで包ふこのごろ

高崎陸軍病院 小 平 勇一
戦線の二回の春と朗らかに辛苦はつげず戦友がたよりは

兵庫縣 山 本 壽之
背につけし小旗も濡れぬあけ方の

雨の峠を召されゆく馬

大阪市 松尾 いく子
みいくさに子は召されたり家守る母は軒場に坐して纏なふ

小倉市 益田 牙谷
子を看護る妻をし見ればたらちねの母のなさけの深きを思ふ

小樽市 中村 もん
雪晴れの青空きよし戸をくれば灰かに春の香りもぞする

和歌山縣 奥村 映水
きざはしを八十路の舟夫の着ふくれてのぼり下りする初詣りかな

群馬縣 佐藤 太郎
藍色と雪の白さに輝きてわが前に立つ上つ毛の山

鹿児島縣 伊野又 サチ子
舟一つともづな張りてゆれて居ぬ冬も南のあたゝかき海

静岡県 一向 山人
愛鷹のいただきに浮く白雲のちぎれゆく見ゆ春立つあした

國見山み空に立てりふるさとに汽車近づけば戀しかりけり

大阪市 谷上 武評
命あらば再び語る日もあらん友と煙草を分けてのみつつ

京都市 千賀 順
大雪にしづもる朝を隣家の下婢の聲の高くつたはる

山形縣 丸岡 長忠

火に身をば燵めて居ぬ

徳島縣 丸岡 長忠
峠路を登りつくして海見れば沖をはるかに船の行く見ゆ

山形 佐藤 壽来
ばらくとまばらに生えておどけたるわがひげ見ればにくらしきかな

久留米市 佐藤 伸六
目ざめたる霧の町かど日のさせばひづめ鳴らして馬車の通りぬ

京都市 野崎 鶴子
うつし世の姿なるらんかへり見る今日のさとりを明日のまよひと

香川県 八十八 益
しら雪のつもるあしたは時ならぬ春とも見ゆれ木々のよそほひ

京都市 舟貝 利吉
凍てつきし鋪道にひびく下駄の音にめざめあふげば星の光りぬ

北海道 花田 融 經
冬のたび心して行けともすれば吹雪に死ぬる人もありけり

京都市 郡司 島誠也
いささかの熱に臥れるわが耳にしぐれの音の心よきかな

大阪市 中木 米三
術もなき己が性悪を思ひつつ爐の

投稿規定

官製はがきに一回二首以内
とし「渾土」編輯部歌壇係
あて送ること



説小
指切小町

小島健三
齋藤清畫

噂の播磨屋

下谷簗町に、播磨屋といふ大きな呉服屋があつて、こゝに一粒種のおふんといふ娘があつた。

世間から見ると、この播磨屋は金はあり餘る程あるし、その上、下谷小町と噂のあるおふんさんといふ綺麗な娘さんが、お父さん、お父さんと、孝行をつくしてくれるし、あんな倅せな方はないと噂されてゐたが、播磨屋喜兵衛は、どうしたものか、いつも憂鬱な顔をしてゐた。

たんでせうね」

「この前の寄合にも顔を見ません。町内の寄合に何か氣に入らない事でもおありでせうか」

「いや、そんな事はございませぬやうですが、寄合のやうな皆さんの顔の合うところへは、暫く御遠慮させて頂きたいと云ひましてね、どうしても出て下さいませぬ」

「ほう——それはまた妙なことを仰しやる播磨さんで、いつたいどうした事情があるんです」

「實は、私も、それを訊いて見たんですが、どうしても仰しやいませぬ。これ以上は聞い

て下さるなど申しまして、顔を伏せるばかりでございます」

使ひに行つた世話役の話に、町内の人々はふうつと溜息をついた。

あの律義で正直な播磨屋さんに限つて、町内の人々に顔向けの出来ない不義理をする譯はなし、といつて、嘘をいふやうな世話役ではなし、現に當人の播磨屋さんが顔を見せないのは、何よりの證據、まつたく町内の人々にとつて不可思議な事であつた。

『とに角、それでは私が行つて、よつく話を聞いて参りませう』

さう云つて立上つたのは、三河屋といふ酒屋の老人。それを世話役は、慌てとめた。

『三河屋さん、お待ち下さい。貴方が何んと仰しやつても、播磨屋さんは逢ひません。もう、人と逢ふのは嫌だといふのを、私は無理に逢つて、やつと、それだけの事を聞いて來たんです。町内の皆さんには、貴方からよくお話し下さい。私は暫く誰とも逢ひたうございませんと、泣いて居られました』

『ほう——これは、いよく不思議な事で……』

三河屋の老人、べたりと、また元の座に坐つてしまつた。

苦勞の種

播磨屋喜兵衛は、奥の座敷で溜息ばかりつてゐる。

そこへ、番頭が恐る／＼はいつて來た。

『旦那、行つて参りました。常在寺の方丈さんの云ふには、それは信心で直すより方法はない。お嬢さんと旦那と二人で、毎日常在寺にお詣り下さい。それには、この三月十七日は誠に日が良い。それで、その日からお詣りなさるが良いと仰しやられました』

『御苦勞／＼、それで、寄進の事を方丈さまに聞いてくれたか』

『へえ、聞きました。が、寄附や寄進はどうでもよいが、それほどまでに云つて下さるなら、寺の池に龜でも放してやつて下されと申しました』

『さうかへ、あの方丈さまは偉いお方だ。それでは、番頭さん、お寺に頼んで、月龜をお詣りする十七日に間に合はして貰ふやうに、御苦勞だが、寺男に頼んで下され』

喜兵衛は、ほつとしたやうに憂の顔をあげた。

世間から美人だ、下谷小町だ、親孝行だと褒めそやされる一人娘のおぶんが、喜兵衛にとつては、苦勞の種であつた。

おぶんは、どうしたものか手癖が悪く、それが娘盛りの十八になると、何かに憑かれたやうに、ふいと外に飛びだして、人の物を盗む癖があつた。

近くでやらないだけに町内の人々には知れなかつたが、そのため折角、まとまりかけた縁談も破れる始末に、喜兵衛は母のない娘だけに一層不懨さがまして、叱つても、脅しても見、手を代へ、品をかへておぶんのこの病的な盜癖を直さうとしたのであつた。

ところが、たうとう、喜兵衛の思案にあまつて、今、番頭を下谷車坂の常在寺の住職に

やつて相談をしたのである。

おぶんの悲鳴

江戸は、今、櫻花の盛りであつた。

常在寺の住職がきめてくれた三月十七日、

この日は、享保十二年の年で、八代將軍吉宗が、上野寛永寺にお成りの日、上野三枚橋の

邊は、大變な雜沓であつた。

喜兵衛は、おぶんにもよく云ひ聞かせて、

これから常在寺へお詣りをし、住職からいろ／＼と有難い話を聞くのだと、喜んで外へ出ると、往來は大變な騒

小
と、

『それ、行つて見ろ、將軍様が、寛永寺にお

成りになるんだ』

と、人々は、素つ飛んで行く。

『お父さん、私たちも、將軍様のお行列を拜

みませう』

『それがよからう』

と、いふので、喜兵衛と娘のおぶんが通り

へ出て見ると、大變な混雜、知らないうちに、押され／＼て、三枚橋の一番人の多い處に出

てしまつた。

はじめのうちは、

『お父さん、手を離しちやいけません』

と、しつかり握つてゐた手も、人込みに揉

まれるうちに、いつとはなくこの父娘は、は

なれ離れになつてしまつた。

『おぶんや——』

と、叫んでも、顔だけが遠くに見えるだけ

で、どうにも近づく事が出来ない。

そのうち、そろ／＼お成りの仕度と見える。

群衆は、前から順序に坐りだした。

おぶんが、ふと、前を見ると、行李を背負

つた男がある。

顔を覗くと、どつかの下男らしい。

『旗本の下男かしら』

おぶんは、口の裡でつぶやいた。しかし、

さうではないらしい。どつか、金持の下男が

大事な品を行李に入れて主家に急ぐ途中、こ

の行列にさえ切られたものらしい。

整理の役人が、忙しさに往つたり來たりしてゐる。

群衆は、しーんと静まりかへつた。

——と、凄まじく美しいおぶんの顔が、

下男の行李を見つめてゐるうちに、妖鬼のや

うに次第に變つて行つた。

病的な盜癖が、夏の雲のやうにむら／＼と

湧出して、おぶんの眼の前を掩ふてしまつ

た。

抜けるやうに白い手、白魚のやうな指が、

下男の背負つてゐる行李の中に、する／＼と

白蛇のやうに滑りこんだ。

凄麗なおぶんの顔に、妖魔のやうな微笑が

たゞよふた。

と、次の瞬間。おぶんの、

『きやア——』

といふ悲鳴が、靜肅に沈んでゐる群衆を、驟

然と沸立たせた。

祈願

『あーあつ』

血を吐くやうな聲とともに、おぶんは、右手を行李に突込んだまゝ左手で、行李の端を握



み、ぐつたりと崩れてしまつた。

『ど、どうしたんだ』

た、大變だアー』

池に石を投げたやうに、騒が騒が擲けて行つた。

東叡山の山同心が駈けつけて檢べて見るとおぶんの右手が月龜にひどく噛みつかれてゐる。

行李を背負つてゐたのは、常在寺の寺男で播磨屋喜兵衛の番頭に頼まれて、月龜を買ひ、それを地藏様のお札と一緒に行李に入れて、常在寺へ急ぐ途中行列に逢ひ、立もどつてゐるのへ因果とでもいふのか、おぶんが手を入れたのであつた。

將軍お成りの道先に不淨の血を流したといふので、おぶんと寺男は番所に引致され、取調べを受けた。

おぶんの右手の親指が、無慘や月龜に噛み切られてゐた。

事情を調べて見ると大した事ではないので、別に咎めもなく、おぶんは喜兵衛に引渡されたが、指の傷口から毒がはいつたのがもとで破傷風にかゝり、危篤に陥ちた。

喜兵衛の嘆は、一通りではなかつた。

これは、てつきり地藏様の祟りに違ひないといふので、常在寺の住職にもお願いして七日間の祈願を籠めた。

すると、不思議にも、その甲斐があつて、右腕は醫者の手術をうけて切つたが、命だけは、取とめた。

とに角、おぶんが命拾ひをしたのは、地藏様のお蔭だといふので、その翌年、發心して常在寺和尚の弟子になり得度して尼になつた。

これが指切地藏の由來で、常在寺は明治の初年に池袋に移轉したので、地藏様もその時一緒に引移つた。

淺 春 靜 思

吉 田 絃 二 郎

いつのころからか庭の隅の隅の繁みに山鳩が巢喰うたらしく、わたくしが庭に下りてゆくと三四羽の鳩が羽叩きをしては、梢から梢にうつり、或ひは裏の竹山に飛んで行く。裏の竹山の外は畑になつてゐるので、時々わたくしの裏の竹山の鳩をねらふ男たちが銃を抱へて畑の中に佇んでゐる。

だからわたくしは庭に下りるのも遠慮しなければならなくなつた。庭に下りて鳩を庭の外に出すことを恐れるからである。

多摩の川原には千鳥が鳴いてゐる。川原の千鳥は群をなし、川原近くの田圃に下りては、まだ薄氷につゝまれた水の中に餌をあさつてゐる。春淺いこのころ多摩の川原にちかく千鳥を聴くのはこのあたりに住むわたくしにとつて、季節的なたのしみの一つである。しかしこゝにも銃を持った男たちが佇んでゐる。時としては美しく着かざつた女性たちを伴つ

た都會の職人たちの姿をも見る。わたくしはこの種の職人者たちに對しては憤りを感じないではをれぬ。早く職季が終つて、わたくしの畑の繁みの山鳩も多摩の川原の千鳥も安全に保護される日の來ることを待つてゐる。

×

今日は今日かぎりの命、否この刹那かぎりの命といふことを頭の中では知つてゐた。しかし實際には「明日の命」をも假定してゐた。

今日は今日かぎりの命といふことをほんたうに覺つたのは五十幾年の生涯に親を失ひ、妻を亡くし、天涯孤獨の身となつた刹那であつた。

頭で知つてゐたことを、如實に胸に感ずるためには五十幾年の苦痛と人生の悲劇を味はなければならなかつた。知ることゝにすることの間に横たはつてゐるへだたりの遠さをつ

くづく思ふ。

彌陀の淨土を知ることはいのりにもできやう。彌陀の淨土を感じることは果して幾人に許されることであらう。未來世が在るか。それとも死とともに一切空に歸するか。どつちでもいいと思ふ。どつちにしてもありがたいことだと思ふ。

死によつて永遠に別れなければならなかつた親しい人たちと未來世に於いて再び逢ふことは、誰もが冀ふところである。わたくし自身その一念に日夜を盡してゐる。

しかしそれは一切あなたまかせのことであり、死とともに一切空に歸するものならば、それが人生の本然であるならばそれもありがたく、尊いと思ふ。

一文の價をさゝげることなしに、人間の世に生まれさしていたゞいたことを考へると、この上にいろいろ自分に都合のよい事を願ふのは、人間の淺ましい利己といふものであらう。振りかへつて見るとわたくし自身の一生は憤りであり、憎みであつたやうだ。その憤りと憎みを思ひ出しては夜も晝も自分の骨を削り、肉を殺ぐ程の苦惱に喘いでゐる。これがわたくしの一生であらう。

しかしわたくしは過去の自分の心の愚さ、自分の心の醜さを悔まないであらう。もしわたくしが過去に於いて完全な人

間生活をしてゐたのであつたら、かほどまでに骨に縛り、肉を焼くほどの懺悔の心を感じることはできなかつたであらう。わたくしは凡人であつたがために、わたくしは人以上に人を怒つたがために、今日の苦惱の生活を忍ばなければならぬことをありがたいと思ふ。

x

わたくしは淨土の存在を知らないと言つた。しかしわたくしは淨土を欣求する。かつて永遠に別れて行つた親しき者との再會を祈念する。

かつてわたくしは世界一の愚者であつたかも知れぬ。そのために現在の苦しい懺悔の生活に懺んでゐる。しかしわたくしは今後もまた世界一の愚者でありたい。そして世間の人たちが想像もしないほどな大それた希望を未來世に對してつながらと思ふ。

わたくしはかつて地上にあり、今、幽冥境を異にして住む人々といつかは再會するの祈念を捨てようとは思はぬ。

人はわたくしの心を未練であると笑ふかも知れない。世界一の愚者を念とする現在のわたくしには人の嗤笑などは何でもない。

何も望まない日がある。

いろいろなことを望む日がある。



マгдаラのマリヤはキリストに逢ひたいと念じてゐた。
かの女も愚者であつた。

それゆゑにかの女ひとりが死後のキリストに逢ふことができた。

近代のキリスト教の人たちはあまりに賢くなつた。だから近代のキリスト教徒たちは恐らく墓からよみがへつて來たキリストを見ることはできないであらう。

しかしこの言葉は單にキリスト教のみに當てはまる言葉ではない。何れの宗教も、賢い人たちのみによつて論議さるゝやうになれば、宗教の醍醐味を失ふ。神學や宗義が組織化系統化されるころは、その宗祖たちの影は薄くなつてゐる。

印度の詩人コビイルは鐘掛屋をして歩いた人である。かれは卑しい職業はしてゐたが、聖徒としてあがめられてゐた。かれが死んで葬られた時、かれの墓を掩うて覆郁たる美花が咲き競うたとつたへられてゐる。わたくしはこの傳説を信ずることはできる。

人間は所詮人間である。と、いつてしまふこともできる。しかし人間は時として佛であることもできる。菩薩であることもできる。かつて人類の間にたゞ一人の釋尊を見たといふことによつて、人間は所詮人間であるといふ概念を根底からくつがへしてしまふ。人間は時に佛であり、菩薩であるといふ

ふことを考へるだけでも、人間に生きて來たありがたさを感じる。

×

机に對してゐると仔犬はわたくしの膝に抱かれてすやすやと眠つてゐる。こゝにも因縁の存在を感じる。部屋の障子には午後の日ざしが漂うてゐる。梅の梢が映つてゐる。ぱた／＼と櫺の繁みのなかに山鳩の羽叩きが聞える。そこにも因縁の存在を感じる。わたくしはたゞ一人で生きてゐるのではない。淺春の午後の日ざしと、梅の梢の影と、仔犬と山鳩とすべてわたくしの魂に呼びかけ、わたくしの魂に通うてゐる。仔犬のために煮る粥の煮立つ音が次の間から靜かにわたくしの魂に通ふ。

無心に梅の梢から梢へと飛ぶ鶯の影が障子に映つてはわたくしの孤獨な心になつかしい春の聲音を感じさせてくれる。鶯はやがてその枯淡な笛鳴きをさへ聞かしてくる。一切は空であるかも知れぬ。然し一切は因縁に於いてわたくしを生かし、わたくしの生活に無限なるものを感じさせる。またしても櫺の繁みの山鳩は閑古そのものゝごとき羽叩きを通してわたくしの魂にさゝやく。

消えがてに残つてゐる庭の隅の春の雪までもがわたくしの孤獨な生活にとつて因縁なきものとは思はれぬ。

俳壇

大田 耳動子



長崎市 池田 眞三

龍けむるすゑの流の蛙かな

評——壯なる龍の飛沫が雲々あがつて
ある。其の飛沫の端の方が奔流をつく
つて流れだしてゐる。程なく谷川とな
り、其處に蛙が安らかに遊んでゐるの
だ。此の龍のあるところから、蛙の棲
んでゐるところまでは、さほどの距り
もないやうで、一幅の繪にする事は至
難ではないやうだ。何か人生の盛衰を
見せられてゐる心地がする。

世田ヶ谷 堀江 八重子

茶の花の霜に枯るゝは甲州路

評——茶の花の霜焼してゐるのを見て、
甲斐の國を歩いてゐるのだと云ふこと
を強く意識したものであらう。茶の花
の霜焼位は、どこにでもある。然し、
甲州路と云はれてみると、山嶺重疊た
るばかりでもあるまいが、何かしら心
置きなく賛成する氣になれる。よく特
徴を捕へてゐると思ふ。表現も力強い。

大阪 六尾 竹雄

ふくよかに置きたる雪をいとはしむ

評——降り積つたばかりの、ふつくらし
た雪。石燈籠の笠の上の雪でもよい。
丁字を包んだ雪でもよい。鉢を覆うた
雪でもよい。よき思繪の滲みと思はせ
るやうな雪をしみじみ見て出来た句で
あらう。作者の優にやさしい心延が、
しのばれる。

富山市 館 南岳

寒鯛やきらめく陽より笹に落つ

米子市 宮本 白土

大いなる櫓の實なればひろひけり

大阪 中本 米三

好き月に照さいにけり梅の影

新宮市 奥村 映水

大霜のやゝに重たき八ッ手の葉

王子 三野 輪江雪

雪の小舎ランプの下の炬燵かな

高松市 八十八才 荒木 はち

だんだらの園のけしきや春の雪

小樽市 中村 茂舞

煤煙に遠くかすめるスキーかな

山口縣 長岡 見智

なまじいに手毬の唄の口につく

大阪 日根谷 記三弘

風ぎてゐる濱邊に一人春を待つ

京都市 水田 七郎

風に吹かれ返りて柳春を待ち

青森市 高松 竹堂

み佛の睡冷たく雪の聲

兵庫縣 山本 壽之

くわらくと風呂焚く家の冬の月

廣島市 小堀 邦香

多ざれやこぼれて生えし朝顔の

東京市 鶴 恵

日向うれし庭はきをれば雀鳴きに

栃木縣 風雲 云海

春月の水面を鳴きし千鳥かな

高崎市 小平 勇一

降るや雪小豚の糞にもぐりたり

新設州 椎葉 球磨蔵

寒行の聞ゆるまでに熱下り

栃木縣 大輪 雲海

春雪の連山飛行悠々と

東京市 伊藤 清川

奔流を追ふ紅の落椿

下関市 關野 公福

外套をかぶりて夜の渡船待つ

大阪府 河内 楠香

平らかに降りたる雪をやれ踏むな

堺市 笠井 松枝

久に會ふ父の衰へ胸さむし

シゲ 子

残月の窓に凍てつく冬の朝

京都市 近藤 内海

旭日のつめたさ散りて川流る

下関市 關野 公福

ともかくも祝ふ雑煮の有難さ

東京市 木村 幹

京都市 はやしせき

陽炎にうたかた残し魚逃ぐる

京都市 堀島 孝治郎

雪解けやまた懸かす老ヶ阪

小樽市 中村 もん

雪晴れの今日暖かし梅の花

東京市 近藤 麗母

なきやまぬ嬰子に朝の雪が降る

北海道 押野 尚秀

蝦夷の春くち柱まづ崩れけり

滋賀縣 重野 ふみ子

雪の朝どこから来たか露の臺

大分縣 石堂 柑山

いたづらに投石はねて池氷る

栃木 大輪 云海

月映ゆる池に浮き出し蛙かな

山口縣 玉木 直亮

船一輪咲きたる香放つなり

群馬縣 佐保 太郎

捕りたきは雪の朝の雀かな

芝 區 町田 淳

寒む室に月ちりばめて冬の夜は

米子市 宮本 悠雄

うかゞへばほろりと落ちし寒椿

小樽市 平井 善慈

たそがれの雪野に埋る指道標

奈良縣 寺田 惟牛

桐の下鉄つめたく立ちにけり

投稿規定

官制はがきに一枚二句以内
とし「俳土」欄欄部係
あて送ること



馬造の出世

佐賀 鈴木 金平 畫

大正……年春場所大角力四日目。結びの一
番に東の横綱梅ヶ谷と西の大関駒ヶ嶽の顔が
合った。兩力士とも、すでに盛りは過ぎてし
まつてゐたが、——角力巧者で徹頭徹尾理詰
めの梅ヶ谷は、四十幾貫の巨體を持扱ひかね
てか消極戦法で引分けを重ね、實力優に太刀
山を凌ぐと云はれる駒ヶ嶽は、あまりに大力
士型なるゆゑに、立合ひの出足がにぶく、勝

味に疎い、「鈍州」の名さへあつて、眼の前
にぶらさがつてゐる横綱の榮位を握みあぐん
でゐる……いや、後年横綱を張つた同方の西
の海に比べれば、駒は確かに運がわるい。悲
劇的な生涯だつたかもしれない。それから數
年経たぬうちに、地方巡業の馬車の中でぼつ
くり死んだ、大酒が祟つたとも云はれてゐる
が——やはり好取組に違ひなかつた。
裏正面の行司溜りの隅つこで、九ツになつ

たばかりの馬造が、父親の馬吉に免れかゝる
やうにしながら土俵を見つめてゐる。一月、
五月、本場所十日間のうち大抵いち日だけの
見物だつたが、馬吉は若いときから何十年と
缺かしたことがない。ひとりツ子の馬造も、
よちよち歩きが出来るやうになつた時分から
この父親のお供だつた……芯からの江戸ツ子
で、仕事熱心で頑り性のかはりに、怠惰と潔
癖が重なり合つて、弟子や金銭に縁遠い。い

まも近所の新しい引越し者から、タタキ大工と悪口されるが、場所前になるとせつせと騒ぎだし、顔見知りの出方に頼みこんで馬造と二人、土俵下に頭張つたときの馬吉は、それだけでもう欲も得もない極樂さまだつた。

馬吉は大の駒ヶ嶽晶眞だつた。しぜん伴の馬造も父親に加擔した。しかし、うつかり口を出すと、「子供に何が分るけえ。」と一蹴されるので、馬造は何も云はないことにきめてゐる。

この朝、馬吉は熱があつた。實は暮から持越しの風邪が、なあにかぜくらゐと多寡を括つてこじらかせてゐたのだ。けふは場所入りだ、と力んで、きのふ一日寝通したのだが、今朝になつてもちつともよくならない。あしたにしよう。そしたら日曜で學校を休まずにすむ、馬造はさう云ひたかつたのだが、咳込みながら襦袢のうへにトンビを引つけて馬造を促す馬吉だつた。留守は、——神さんが死んでからは、かりいふときの役目は一軒置いた隣りの齒入れやのおかね婆さんにきまつ

てゐる。

「お父つあん、大丈夫かい？」

この一番の仕切直しの合間に、馬造は土俵から眼をはなすと、父親に訊いた。時々伴のからだを突離すやうな仕草で咳込むのが心配だつたから。

「うん。馬吉は前のめりの上半身を起き直しながら、笑つてみせた。『おめえ、飽きたんぢやなからう。』」

立ち上がった。わあわあの喚聲が一瞬静まつたと思ふと、駒の右が入る。すぐさま吊身の寄り、じりじり梅の土俵が詰つて行く。もうひといき、といふところで梅の動きがびつたりとまつた。

「いけねえ、差手が換つて力が入らねえ。馬吉は眞つ赤な顔で喘いだ。寄られながら梅は巧みに捲きかへて浅い左四ツ。駒は焦つて投げに小手投げに行つたが残された。そのまゝ一呼吸また一呼吸。館内の喚聲が捲き起る。二階、三階の電燈の光りが急に眼に滲んで来るやう……と、水が入つた。

「お父つあん、分けになるだらう？」

馬造が云ふと、

「子供のくせに、生意氣云ふねえ。」

馬吉はのぼせあがつてゐる。

水入後、駒はまた攻勢に出た。まつたく、

こゝ何年にも見られなかつた駒の元氣だつた。梅の、根を張つたやうな腰と突出た巨腹に、ひた押しの寄りを遮ぎられた駒は執拗な小手投を繰返した。それには流石の梅も動揺しだした。東から正面土俵に、機を見て挽回の策を講じやうと懸命に廻りこんだが、最初からの守勢一方はどうせうもない、遂に困憊の最中に棒立ちになつたところを、最後の駒の小手投がきいた、地響き打つて梅の巨體が土俵下にころがり落ちた……兩方の耳が、一時に寒がつてしまふやうな喧騒が渦を巻く。そのさわぎの中に、土俵では駒ヶ嶽が新聞社の贈賞銀盃をうける、歸り客がそろそろ座を立つ——

「駒ヶ……」父親がさう云ひかけたと思ふ。急に氣づいたやうに馬造は、

「お父つあん、混むから早くかへらう。」と父親を促した。すると、さつきのままの姿勢で俯向いてゐる馬吉が、

「あわてると怪我をするぞ、ゆつくり後から行かう。勝たせたい駒が勝つて、何だか氣が抜けちまつた……」弱い聲で云つた。

馬造はふと父親の動作を眼に入れた。口に當てた手拭へべつとり赤いものが滲んだ、それをあわてて折疊むと襦袢のふところに捻ぢこんだ……血だ。

「いゝか、お父つあん何だか頭がカッカッして眼がまはりさうだ。大丈夫は大丈夫だけれど、電車に乗つたら、おめえが切符買つてくれよ、乗換へもら分あね。」

「うん。馬造はこつくりしながら、泣きたくなつて來た。」

「お父つあんが連れられるやうで可笑しいだらう、が、電車で睡つちまふかも分らないからよ。」

馬吉はかういひながら馬造に藁口を渡した。さうして席を立つと、いやと云ふほど馬

造の右手を掴んだきり、はななかつた。

2

朝から雪がふつてゐた。角力見物の日からもう十日経つ。馬吉はすつかり寝こんでしまつた。高熱がつゞくあひだ、蒲團から兩の手を出してもがいたり呻いたり……言葉らしい言葉をまだひと言もしやべらない。町内の野川先生が毎日診察に見えるのだが、附添人が子供の馬造だけでは話相手にならない。

「かはいさうにな、かはいさうにな。」かう云つて馬造の頭を撫でるだけだ。おかね婆さんが來合せてゐると、

「こんなに熱があるんぢや、病院へ連れて行くわけにもいがないな。うんと溫くして、頭をどんどん冷やしなさい。」

野川先生はむづかしい顔をして云ふ。然し先生の歸つた後で、おかね婆さんは、

「はやりつかぜだとき。すぐ癒らね。」と馬造に云ひきかせた。――

ひるごろ、年始にも來られなくつてすまない、と頭をかきながら馬吉の弟弟子の仙八

がやつて來た。そして馬吉の寢姿を見ておどろいた。なぜ早くに知らせなかつたのだといふ不服だつた。然しその苦情を云ふ相手が、うんうん唸つてゐるだけでは拍子抜けがする。仙八は馬造に十錢銀貨二つを渡すと、

「學校も休んでるんだらう、氣の毒にな。けふは小父さんがゐてやるから、活動へでも行つてきな。」

大丈夫かなあ、と馬造は思ふ。然し今年の正月は角力見物のほか、どこにも出なかつたと思ひ返すと、仙八小父さんの言に随つても決してわるくない――彼は早速とび出して行つた。

入れちがひにおかね婆さんが來た。仙八も古い顔馴染だつた。おかね婆さんは仙八の來たのを幸とばかりにくどくど話した。

病人の頑固なこと、かういふ場合に出會ふと親子二人だけの暮しの頼りなさがしみじみ分ること、それから馬造の素直で孝行なこと……

いよいよいよいよ仙八はかう言葉を引出した。

「病人は氣性があの通りでしやうがないが、馬坊は病人がよくなり次第、私の方で引受けよう。どうも女ツ手のない家は、子供によくないからね。」

おいね婆さんは、ほつとしたやうにうす笑ひをうかべた。

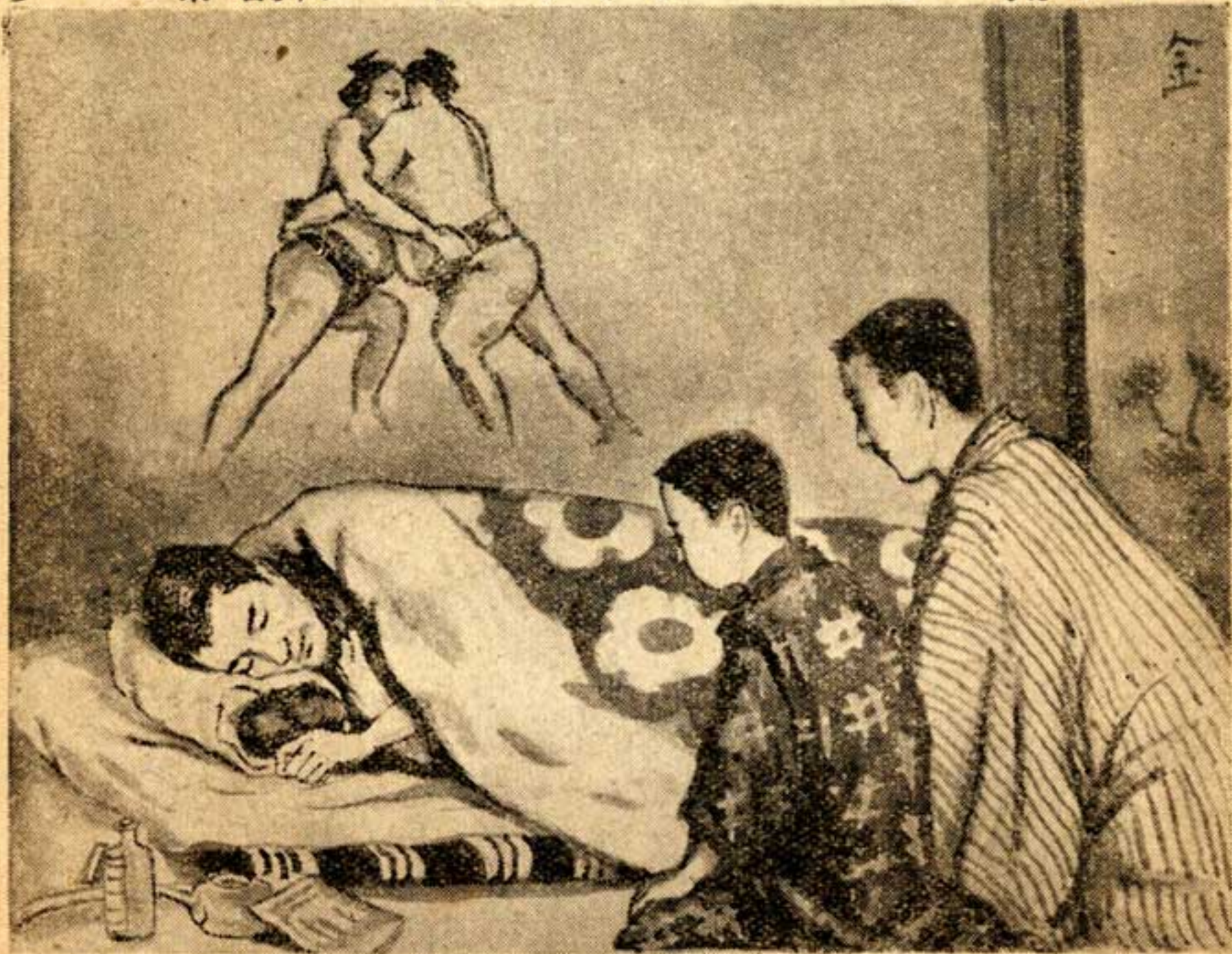
仙八は、急に改まつた態度を示して、

「これから手不足をさせないから、養生を第一にしないよ、早く癒らなければ馬坊がかはいさうぢやないか。」

と、ふりふりしながら云つた。

3

翌る日から、ひるまだけ仙八のかみさんのお妙が小僧の三吉を連れて、馬吉の看病をしに來ることになつた。馬造は學校へ通へるやうになつた。——が、五日経つて、やつぱり雪がちら



ちら降つてゐた晩方、ちやうどお妙が歸り支度をしてゐると、

「おかみさん、いつもすまねえな。相かはらず熱の退かない病人は、かう喘ぎ喘ぎ云つてから、馬造の名を呼んだ。お妙に拵へてもらつた夕食の膳に向つてゐた馬造が、

「なあに？」とそのまま返事をする、馬吉は蒲團の合せから右手を差出して、力無いお出でお出をした。馬造が枕もとに行くと、彼の手に握る握んだなり、

「お父つあんがゐなくても大丈夫だらう——角力は面白かつたな。駒ヶ嶽が勝つてよかつたな……」

かうしやべりかけて、不意に、わツはツはツ、と仰山な笑ひが喉を突いて出た。同時に子供から手を放した——笑ひ聲がつづいた。その笑ひ聲が弱まつて、かすれて行つて、やがて森としてしまつた。が、顔だけが笑つてゐる。笑つたまんまで馬吉は死んだのだつた。(つづく)



淺

春

雜

筆

武 藤 叟

鐵道沿線の廣告板の獻納運動

が、政府の手で行はれるようになったと過日の朝日新聞は報じて居る。これは僕が十年前、二度目に巴里から歸つて來た時から、深く心に期して、機會ある毎に獻策して來たことであつたが鐵飢饉と結ばれた運動とは云へ、實現することになつたのは何とも欣快至極である。

× × ×

十三年九月一日の大暴風雨で東京の看板がメチャメチャにや

られた。僕はその頃國民新聞の『隨想』を受もつたので、東京の看板撤回運動にこれ程のい

ゝ機會は無いと云ふことをしきりに慫慂した。又、都市風景協會をして、會長會我子爵の名を以て當局に獻策せしめた。これも鐵にして約壹千五百萬圓程度になることがその時わかつた。

× × ×

この頃、日本が偉くなつたことをシキリに聞く。聞くまでも無く自分等にもよく解る。自分

等もそれを信ずる。しかし、九十九町を九十九分で來たからと云つて、あと一分で百町に達するとは限らない。否、多くの場合、その殘された一町が非常な

大きな困難を教へて居る。山にすれば胸つき一町の急坂なのである。

× × ×

我々の文化は世界の水準に達した。それは三十年前に云はれたことである。十年前にも云はれたことであらう。しかも、今

から三十年後にも同じ氣持で云はれるであらうと思ふ。何故ならば、我等日本人のためには九十九町に達すれば、殆んど百町だと思つて居るからである。算術の上ではそう行くけれども文化の上では、あながちそうは行かぬのである。百町と九十九町の間には嚴然とした鋼鐵の一條を劃して居るのである。

× × ×

思ひあがつた氣持を棄てなければならぬ。鐵道沿線に、あんな看板が並んで居たり、首都の看板が今のような醜態をさらして居るようでは、とても文明國とは云へないのである。それは一つの例にすぎないが、そのよ

ようでは、まだ一人前にならないのである。

× × ×

僕とても、新しい文化は、常に幾分の野蠻を含有して居なければならぬことを知つて居る。頂上は、谷に下る他無い。だからと云つて、頂を見ながら、頂を極めずに居られないのが文化の宿命である。只、願くは如何に永く、高嶺の花を眺めるかにある。

× × ×

この頃自分は又風紀警察官の設置を力説して居る。かつて警察廳は啖噓を吐くことを禁止したが、なかなか履行出来ない。その他、帝都の美觀や衛生設備の向上を希ふものにとつては、市民の間に混入して、市民と共に

に協力する特殊なリーダーが必要なのである。それを受持つのが自分の云ふところの風紀警察官である。風紀警察官には小学校の校長や、目撃した宗教家等を用ゐるようになんぞして居る。

風紀警察官は、正服を用ゐないで、普通の着服を用ゐさして、全く市民と區別のつかないことを必要とする。只、萬一、醜態がおこつた場合の爲めに、着服の内ポケットに、特別な風紀警察官章を佩用せしめておく。丁度、アメリカ映畫に見る刑事のように、必要に応じてのみ、その職章を見せるに止めしめる。こんなことでもしない限り、このダラシない野蠻の矯正策の無いことは悲しい。

× × ×

岸田博士が、伯林のオリンピック

ツクのボートレースコースの下見に行つた時、煙草のスイガラを川の中に棄てた。棄てた直後そこにあられた競技員が、ステッキの先で、そのスイガラを取つて、數十間はなれたゴミ箱に棄てに行つた。博士はべつとりと冷汗をかいたと云ふ。

その岸田博士が「伯林から巴里に來てホツとした。巴里の街へは紙屑も落ちて居る。伯林の清潔には恐縮せられたが、巴里のゆとりには慰められた」と云ふようなことを書いて居られた。綺麗に掃き清めた庭に、四五片の落葉があるのは却つて風情がある。が、紙屑の中から、ペーダメントが見える程度の不潔を諷美されたので無いことは

承知しておくべきであらう。

× × ×

資源が無いクセに資源を無駄にすること日本人の如きは珍らしい。ドイツでは、各家庭から棄てるもろもろの屑を三つの容器に區別して、その再生の便を計つて居る。昔の話であらうがカーネギーが、二人の青年の何れを自分の秘書に採用しようかと迷つた時、次のような試験をした。即ち、郵送されて來た書物の小包を二人におのおの一個づゝ開かせた。一人はその包み紙や紐までも大切に保存し、他の一人は、中身の書物を取り出すと、包み紙や紐はそのまゝ屑籠の中にすてた。カーネギーは後者を採用した。不必要な、微微たるものに時間や手数をかけ

ることは文化進展に邪魔だからである。

が日本には、カーネギー程の富を擁せずして、このカーネギー風をやる人が多々ある。これはアメリカに於てはじめて果敢な行爲であるかもしれないが、日本や獨逸では、決して賞揚すべき行爲では無いのである。まして、鼻をかんだ紙を道に棄てるに到つては、美觀と衛生の上からの目玉も頂戴しなければなるまい。

× × ×
自分は少しく文化を云云しすぎたのではあるまいか。戦場に於ては、生命を捧げて、邦家千年の安泰確保のために働いて居る人すらあるのに、悠然と首都の美觀などの閑問題を論じて居

ていゝのであらうか。自分も一應はそう思つて見る。

が、支那觀察から歸つて來る程の人が、皆、或は支那の建築物の壯大を賞め、或はその色彩の雄渾なるを讃へる。その他、支那の文化のあなどりがたいことに、むしろ、頭を下げて居る人ばかりである。これでいいのであらうか。これで本當の征服が出来るであらうか。いくらヨボヨボでも親爺の頭をなぐることは出来ない。日本の文化が、いつの間にか支那の文化の上を行かないかぎり、彼等を眞に心服せしめることは出来ないのである。こゝに於て、我々文化人は、いのちを的に戦ふ戰士達の心の如き深い決心を以て、文化を擁護し、文化を高潔にして、

他日、文化に於てユエイを爭ふ日に備へなければならぬと思ふ。それこそ、戦場の勇士を迎へる眞の態度であり、彼等に會はせ得る唯一の態度であらねばならぬ。凱旋の日は何時到るかは計り知りがたいが、雖然と混然と、醜惡と不汚の帝都を以て、彼等を迎へることは、クリーク風呂の勇士に下水の風呂を以て迎へるようなものだ。留守番の名が泣くであらう。

× × ×
頃日、自分は、セルフメイドマンソサイティを組織中である。その根幹となる實業家十數人は、すでに毎火曜日に山水樓で午餐會を開くこと數十回、目下その日本名を、興人會としようか、自啓會としようかと思考

中である。云ふまでも無く、セルフメイドマンとは、獨立獨行自營自主の人の謂で、親の御威光がモノを云つたのでも無く、五斗米に膝を屈したのでも無く、威武にも富貴にも節を曲げず、裸一貫で、惡戰苦闘、荆棘の路を切り開いて來た人の意味である。しかも、現在は、何かの部に於ける最高權威者であり、嚴然たる一家見を有する人であることを條件として居る。フランスでもわざわざセルフメイドマンなる英語を用ゐて、その存在を特殊あつかひにして畏敬して居るが、僕は資源にとほしい日本こそ、これ等の人々を最も尊重し、これに就て學ばなければならぬと信じて居る。小僧から身をおこした人、玄關子か

郁芳總裁御東上

淨光會に御垂示

淨土宗境徒の衆議院議員より

結成されてゐる淨光會は二月十

六日、夜増上寺に於て開會され

たが、本會總裁、大僧正郁芳淨

土宗管長親下にはわざ／＼御臨

席の爲老軀もおいとひなく御東

上遊ばされた。

當日午後六時より増上寺黒本

尊前にて御回顧の後法然上人

の宗教念佛往生の信仰について

懇篤なる御垂示があつた。

終つて推尾代議士の紹介によ

り民政黨代議士山本厚三氏が謝

辭を述べ、續いて里見淨土宗執

綱の挨拶があり、晚餐、閑談に

うつつた。

ら發奮した人、寒氣凜烈たる中
を乗り越へて、靉々たる人生
の花を開き、しかも、かつての
自分の難澁時代を忘れず、常に
後進の育成に献身的努力を盡し
て居る人、國家の新しい資源獲
得に幾多の進言をして居る人、
この人達の尊敬せられなければ
ならぬ理由は、幾重、幾十重で
ある。

× × ×

日本のも一つの大きな缺陷は
學生と官吏を尊重しすぎる事
である。しかも日本に於ては、
官廳は學窓の延長であつて、苗
床の花を温室へ移したようなも
のである。日本みたような貧乏
國には、最も不必要なブチブル
思想の謳歌版なのである。

畏れ多い話であるが、明治

大帝が、皇族を武官にしたて
させ給ふたお尊志を拜したなら
ばこのコマチャクレブチブル根
情など、冷汗三斗の思ひがあら
う。即ち明治大帝は、御自身
の御代に於ける建國以來の尊皇
思想の徹底に酬るには、御近
親の方の全部を護國の第一線に
立たしめねばならぬのかしこ
き御決意であつたと承つて居
る。かの英國に於てさへ、大戦
當時、眞先に從軍したのは、ケ

ンブリツチ、オックスフォード
に學ぶ顯官の子弟であつた。申
すまでも無く、英國は志願制度
である。若し日本が、英國と同

じような志願制度であつたとし
た場合にも勿論それに劣らざる
現象を見るやうにしなければな
らない。僧侶をあやまるもの

は信者の正しからざる信仰であ
る。學生官吏をあやまるもの
は、國民の正しからざる期待で
ある。あまやかしすぎである。
こゝに於て、僕は再び、日本に
今必要なるものはセルフメイド
マンの鍊鐵の如き意志と實力で
あることを繰りかへしたい。

× × ×

これを書かうとしてふつと梅
の花を思ひ出した。チカチカす
るような空氣の中で、一輪の白
い梅を思ふこと程、淨く豊かな
心は無い。季節に關する感覚の
うちで、おそらく最も愉しく高
潔なものであらう。それに、最
も東洋的である。梅一輪でゝの
暖かさを、日本の現状におもひ
あわせてこの筆を擱く。

童

話

わ
か
れ

瀬田 彌太郎



ゐるのでした。

ある寒い朝のことでした。いつもはおそくまで寝てゐる照子ちゃんが、まだ暗い内に眼をさましてしまひました。そして着物をちやんと着換えて、何と思つたか、その薬のはいつた瓶をかかえて、裏口から出てゆきました。ちやうど朝早く、お母さんが近くの神様へ朝詣りに出ていらしたので、裏口は細目に明いてゐたのでした。

三町ばかり先きに御親類の家があるのでした。そこは照子ちゃんが生れて間もなく、里子といふものにやられて、其處の家の子になつて一年前まで暮してゐた家があるのでした。一年前お父さんのお家へつれて返へられてからは、一度か二度、お父さんにおんぶされて、連れていつてもらつたことがあるきりで、自分ひとりでいつたことは決してなかつたのでした。

然し照子ちゃんはよちよち歩いて、道も間違えずその家につきました。此も下婢が朝早く裏口を明けて出たあとから這入つてゆきま

照子ちゃんは五歳になつた女の見でした。

『ア、うまい』

照子ちゃんのお家は挽物細工といふお仕事をしてゐるので、五六人の職人を使つて、夜おそくまでお父さんはお仕事をやつてゐる

と云つて、ごとりとコップを瓶の口に伏せて、それからぐつすりいびきをかいて寝ておしまひになるのでした。

のでした。夜おそくお仕事をすませて、それから枕下に置いてある大きな瓶の中の、薬の

いつも其の頃に照子ちゃんは夜具の隙間から眼を見開いて、ちつとお父さんが

はいつたお酒を、コップに一杯、ごくごく

『ア、うまい』と云つて薬のお酒をおのみになるのを見て

した。

奥の部屋の襖を明けると、そこに生れてから四歳の年まで母親同様に育てて下さった伯母さんがたつた一人で寝てゐたのでした。その伯母さんは紙のやうな白い顔をして、骨張つた身體で寢床の上に、何か痛い者に觸るやうな恰好をして横になつてゐましたが、伯母さんはもう三日前から湯や水もののどに通りぬ程悪くなつて、何時死ぬかわからぬとお醫者様に云はれてゐるのです。

伯母さんは照子ちゃんが入つてきたので力なま相にガクリとうなづいてみせました。

『いらつしやい』

といふお挨拶なのですが、お病氣が大層悪いので、それ位しか出来ないのです。そしてなつかり相にちつと照子ちゃんのお姿を上から下へと見下ろしてゐらつしやるのでしたが、物はもう一口も云へないので、ただ幾度も幾度もガクリガクリとうなづいて、眼に一杯涙をたたえてゐらつしやるのでした。

照子ちゃんは枕下に近よつて、そのお薬の

はいつたお酒をコップに一杯ついで、何と思つたか、伯母さんのお口元に突出しますと、これまで家族の人がかはるがはる、此はお藥になる飲物ですからお上りなさいと云つて差出しても、首を振つて飲まなかつた伯母さんが、上下の唇を突出すやうにしてコップのへりに吸ひつけて、一滴ものこざすゴクリゴクリとみんな飲んでおしまひになりました。

そして

『あゝおいしかつた』

と、お口では云へないので、舌鼓を軽く打つて、さういふ意味を兩の眼にふくませてちつと照子ちゃんの顔を見てゐらつしやるのでした。

照子ちゃんは伯母さんがお酒をのむのをちつと見ておりましたが、のませてから安心してたものか、それとも少しは眠くもなつたのでしよう、伯母さんの裾の方から夜具の中へもぐりこみました。伯母さんは痛い身體を少しにじらせて照子さんを背中の方へ入れて瘦せた身體を照子ちゃんの身體にくつつけてやり

ますと、小さいいびきをかいて照子ちゃんは寝てしまひました。

照子ちゃんのお父さんのお内では大變でした。朝目がさめると照子ちゃんがないのです。ちゃんと着物を着かへてゐるので、誰かがやつてきて着かへさせて、連れていつたといふ風に見えるのでしたが、何處へ行つたのか、かいもく見當が付きません。挽物細工のお仕事もめちやめちやです。職人達は手別けをして近所の子供の集る場所を、片端から探し廻つてゐますが、近所の子供は誰一人照子ちゃんを見た者がゐないのです。お父さんは近所の照子ちゃんを可哀がつてゐる伯母さん達を訪ね廻つてみましたが、此も照子ちゃんを遊びに連れていつた人はゐないのでした。

お父さんは近くでやつてゐる水道工事の穴のなかまで見て廻りましたが、矢張見當らないので、それではいよいよ警察へお頼みして探してもらはうといふ事になりましたが、萬一里子にやつた伯母さんの内へ、誰か平生あ

まりいつてない人に連れられていつたのでないか、一度訪ねてみようと思つて、お父さんがやつてきました。

そのお内はミシンのお仕事をやつてゐましたが、皆店の間へ集つてゐたので、照子ちゃんの來たのを知る筈がありません。それで一同びつくりしました。お父さんはがっかりしましたが、此處まで來たついでに伯母さんを見舞つてゆきましようといつて、奥の間まで上つてみまもと、伯母さんの枕頭に見おぼえのある藥の酒の瓶があるので「こんなところに私の内の酒瓶があります變だナ」

とお父さんは云ひました。伯母さんはもう口がきけないのでしたが、皆が照子ちゃんのことと心配してゐるのがはつきりわかるのでした。それでしきりと眼で自分の裾の方へ目配せしてゐましたが、伯母さんところの女の人が

「何かしきりに裾の方を氣にしています、お

むつでも濡らしてゐるのでしうか」

と云つて裾の方をまくり上げると、そこに照子ちゃんがぐつすり寝込んでゐるのでした

『よく無事でゐてくれたな』

と云つて涙をこぼさんばかりにお喜びになりました。

『それにしても、どうしてこんな所に一人で來たのでしう』

と皆を振り返つて仰しやいました、が、すぐ不審相に

「此の瓶が此處にあるのは、照子、お前が持つて來たのかい」と、いろいろ照子ちゃんに尋ねて見ますが、照子ちゃんは叱られるものと思ひ込んでしまつて何も云ひません。

『お前は伯母さんに此のお酒をのませ上げたいので持つて來たのかい』と云ひますと、伯母さんがしきりとうなづいて、その通りですと云ふ合圖をなさいました。

『道もろくろくわからないのに一體何

と思つて持つて來たのだい』と云つてお父さんは呆れ返つてしまひましたが、伯母さんところの女の人とはみな此の時聲を上げて泣き出



圖

白梅抄

岩野喜久代

あなかしこ如來ましますおん域と千株の梅の
香を焚くかな

小沙彌出で案内し行けば梅ながら妙色身に逢

ふここちする

花ちるも傷ましからず梅の下清らに白き沙の

つづけば

僧の君掃くこと勿れ落葉のたぐひにあらじ梅

花ちる道

白梅の奥に法師の立居する諸堂つらなり鶯の

啼く

梅咲けば寂しきところいよよ澄む習ひとなり

ぬこの三年ほど

しました。伯母さんもボロボロ涙をこぼしてゐましたが、いかにも嬉し相に、いくたびもうなづきうなづき照子ちゃんのを眼も放さず見つめてゐられるのでした。

お父さんに初て照子ちゃんの良い心持がわかりました。照子ちゃんは育ての親にかうしてお暇乞ひにやつてきたのでした。

『あゝさういふわけでしたか、何といふ此の兒は優しい心を持った兒でしょう』とお父さんも感心しておしまひになりました。

それから暫立つて

『何時までも此の儘置い

ておきたいのですがともかく、一度宅へ連れて返らないと皆が心配してゐますから、一度歸つて亦お見舞に連れて上りましょう』とお父さんが照子さんを抱き上げると、伯母さんはもう此で安心と云つた顔をして照子ちゃんに二度ばかりうなづいて、別れを告げる風でしたが、照子ちゃん父子が、歸ると誓して、お浄土へお旅立ちになりました。

皆様、どうして五歳位の子供が、ひとりでお暇乞ひに來たのでしやう。

それは此の世にちやんとゐらして人間の眼にだけわからない佛様が手を曳いて連れて來て下さるのです。

死に掛つた人が是非あひたいと思つて心から佛様にお願ひすると、こんな小さな子供の心まで呼びさましてちやんと眼の前へ連れて來て下さるのです。皆様、人間の誠心といふものは千里の先までも通じる物であります。

(挿畫・齋藤 清)

淨き友の會だより

來 聽
歡 迎

例會だより

東京白山上「淨き友の會」その後の歩みを簡単に日時人数講話題目に就き記して置かう。

第九回 十二月四日、參集廿二

名。講話「念佛行儀について」。

第十回 十二月十一日、廿名、

講話「五濁惡に就いて」。

第十一回 十二月十八日、廿八

名。講話「法然上人の御生涯」。

第十二回 一月十五日、傳通會

館にて約六〇名、講話「般若波羅蜜多心經解題」。

第十三回 一月廿二日、廿二名、

講話「觀自在菩薩の意味」。

第十四回 一月廿九日、廿四名、

講話「五蘊皆空の理」。

同毎の健實な足どりに人は講話

に座談に大きな收穫を與へられる

信

仰

座

談

左に「淨き友の會」の信仰座談のかづくの中若干を抜書して見ませう。

○觀音の姿

本所老働窟主平野潤一氏「觀音の三十三身といふことをよく申しますが、一體どういふ譯でせうか」中村師「觀音の化身相については、心經講贊中に申し上げます。

三十三身に限られた譯ではありません。

普門と申しますやうに色々な姿となつて表れて慈悲救済の心を示現せられるのです。一口に申せば、それは、對者によつて對者

を受容れる心持です。對者と一つになつてそれを導いてゆくことです。これは仲々難しいことですが、

それだけでなくは眞の慈悲心、眞の親心は表はされますまい。教師が生徒の立場を無視し、大人が子供の心持を理解せずに對者は出来ないでせう。眞の指導は、自ら對者の境地に立入つてやつてこそ、可能でありませう。」

平野氏「觀音の觀は覺の意味ですか」

師「聞です。觀音は聞世音の意です。新譯は觀自在です。觀世音は

譯です。ここに世音といふのは、世の惱みを指します。所謂塵沙の惑です。それを惱める者の心になつて聞いて上げる。泣蓮寺の夜話といふ話がありますね。色んな人がお寺へ行つて愚痴をこぼす。和尚さんは唯だその話を聞いて上げる丈ですが、村の人はそれで満足して歸る。つまり、それが同情な

のです。本當に相手の心に觸れて上げることなのです。それが聞の姿です。觀音の化身相も、つまりそれを表はしたものです。しかし本當にあらゆる事を知つてる者にして始めて世の如何なる惱みも聞いて上げられる。解つて上げられる。觀音力といふのがそれだと思ひます。」

平野氏「菩薩にも色んな地位がありますか」

師「光の性質は同じでも新月か

のであつた。第十回にはいつも洋服乍らに珠数袋を忘れぬ大森間部詮輝氏持参の法樂レコードが會員を歡ばせ、第十、十一、十三回は、静岡瀧口吉之助氏の眞摯な姿も見え、第十四回には北海道小樽淨友會の平井善慈氏が遙々上京参加せられた。新會員に鶴見片山梅子、江角金市氏等が加入された。第十一回昭和十三年最終回には、會の世話役として、間部、吉田、戸谷、千葉等の諸氏が午後より集新年會の案を練る、尙ほ十一回には講師、會主、司會への會員よりの美しき感謝の意が表せられしに續き、一方鶴見奥平昌壽氏が先生に個人的にその苦しみ心境を訴へられる間、會室では禮拜體操創始者長井氏らが突如参られて創案の趣旨を説かれた。第十三回は大森原田筆子氏が令嬢と共に深い信仰上の疑念を質され處の度こそ往生必定と喜び歸られた。

ら藏月まで種々の姿があるやうに、菩薩にも五十二位ありとされてゐます。十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺です。前の五は夫々感情的、情操的、意志的、利他的(金剛位)、生産的の姿と言ひ得るのでせう。云々」

○人生の貴さ

石川巳之助氏「私は危ふく五十年の生涯を棒に振る所でした。今の心境は、何と言ひますか、丁度一茶の『明月や江戸の奴らは何しとる』といった氣持です。人生の本當の意味も知らず、水の上の泡沫のやうに上面だけ浮いて流れて消えてゆく所でした。有難いことです。」

師「ショーペンハウエルでしたか、人間は退屈と不平の間を往來する振子のやうなものだ、といひましたが、實際さうした生活が多

い。人間に生れた貴さを知らねばならぬのですが、それが僅少です。

經典には須彌山の頂から木綿糸を垂らしてそれが大海の底の針のメドを通つてその針を拾ひ上げる事が出来る位と譬へてゐますが、生物の数の無數の中に極く僅少な人間として生を享けた、有難い機縁を私共は知らねばなりません。

近代の宗教的天才であつた山崎辨榮上人は何時も『ぐづく』してると日が暮れると申されましたが、實際三十年五十年は夢の間です。」

吉田耕作氏「本當に。私はこの頃、時計の秒針のグン／＼廻るのを見ると、何となく恐ろしくこわいやうな氣になりますね。」

師「善導大師は『強健有力の時、自策自勵して常住を求めよ』といはれてゐます。」

平野氏「生理的には生きてても

信仰的に生活してゐる人は少ないですね」

師「普通に唯だ生きてゐる丈では生存に過ぎないでせう。生存權といふ語も感がよくないですね。それでなく、眞生正命でなくては眞の生活とは申せないでせう。」

新井嘉門氏「加持などはどういふものでせう。」

師「さあ、お加持も、單にお寺でやつて貰つた丈では、何の力も加はらないかも知れません。眞に佛の力がこちらに冥融して眞生の確立することが本當の加持だと思います。」

だから淨土教で云へば心から念佛申す時に自然に佛の増上緣に促されて眞實生活に入り得るものです云々。」

○死への徹底と不死の信仰

平野氏「死は確かであるが、何

日かといふことは不確かであつて、人間はこの不安の中に生きてゐる譯です。どうしても人生觀、未來觀を得ねば安心出來ない。日露

の戦の時のことです、旅團長師團長あたりの人は流石に立派なもので近くに砲彈が炸裂しても平然たるものですが、中少尉位の人は股の中へ頭を突込むで了つた方も始めはあつたやうです。

師「念佛部隊隊長藤森部隊長等、本當に死ねる覺悟の出來た方が武人に相應はしい。熊谷蓮生坊が入信の心持もさやうな徹底したものでした。生死の巷をくぐる時死線を越えた覺悟も出來るのでせう。今度の蘇州河渡河戦にも下士官で彈丸雨飛の中を素裸で指揮した人もあるさうです。」

平野氏「南山戦の最中に釋宗圓師が平氣で座禪してゐたのには觀

戰の外人もひどく驚いた。それで戰後米國に招待されて廻遊されたといふことです。」

吉田氏「今度も『土と兵隊』によく似た例が出てゐるではないですか。十二月の『淨土』にも引かれてゐますが。」

師「新聞社の人の話でしたが、今事變で外人も日本人の底力に驚いたが、どうもそれは佛教の力らしいといふので佛教に目をつけ出したとのことです。カイザーリングも、日本婦人は生れ乍らにして佛教徒だと言つて居ます。無我性と内的性の驚くべき力があるからだと云ひます。また日本の藝術家も亦佛教的だと云いて居ます。また所謂婦人の三從といふのは、自我を主張せずに、生命も生活も相手を生かすべく投出してゐる姿でありませう。日本人は、いざといふ

と、皆かうした心持が湧いて出るらしい。義と情には白刃の中に身を投出すといふも同じでせう。」

吉田氏「婦人の職場がふえるのも婦人のそうした心持が歓迎されるからでせうか。」

平野氏「死ぬも生きるも天命では物足りぬ。死後はどうなるかをしつかり確信したい。」

師「死ねば無といふ人も、兎角墓を作つたり記念物を作つたりするものです。灰にして海に撒いて了つてもよささうなのに、そうではない。人間の氣持はそうは行かぬものです。死なぬ眞實なものを握りたい心持、これは誰にでもあるのです。朝に道を聴いて夕に死すとも可なりといふのも結局同じ心持です。堯爾として死ねるのは斯る眞實なるものを把握し得た者のみでせう。」

○焼香の心持

千葉寛定氏「或る婦人の方が、英靈の回向に焼香を二邊されたら或る人が一遍でよい、それ位知つてたらどうだと大勢の前で言はれた、一遍では心すまなかつたので二回したのに、そう叱言を喰つたとのことで、伺つて欲しいと申しますから。」

師「焼香でも線香でも同じことで、一回又は一本は一心を表し、二度は戒香定香を焚焼する意、三度するのは身口意の三業清淨を偶意します。要は身心を清める心持ですから、清らかな至誠の心で上げればよい譯です。また香は匂ひのよい程よいとされます。昔の武人が戦場に赴く時兜に香を炊きこめたのもその心です。」

○自省と献身

平野氏「信仰の眼が開け佛の光

明に照さるれば益々自己の暗黒さも判然して、是ではいけぬと思はれます」

師「田の草もとれば稻穂の肥かな、で、益々向上の縁となるものです」

平野氏「自分の暗黒も分るが人の迷ひの姿も悲まされる。その爲には自己の一分を犠牲にしてもよい氣になる。そして一層佛の力に廻る氣になる。捨身抖擻といふ心がそりでせうか。たゞ御意の儘に、御思召の儘にと思ふ心になる。」

師「それが南無の姿です。不惜身命、それが即ち大生命の保全になります。小生命を大生命に打ち込むことです。兵隊は國家といふ大生命に南無する。職業に身を打ち込む事が國運を増進する事にもなる。その姿は共に南無です。」

平野氏「日露大海戦に火夫は戦

況の動きは全然分らないが石炭焚きに一生懸命だった。」

師「皆が大將では困る。そこに職分、思想の貴さがある譯です。」

平野氏「所が近時の青年達の多くは物質主義になつて來て餌のよい方に浮かれ出して許りゐる。」

師「そうした傾向も國家の非常時には影をひそめます。いざとなれば日本人は全てを捨て得る。不知不識に無我の教養が出來てゐるので、大君の爲には全き獻身の心になれるのだと思ひます。」

○存在觀と生命觀

江角金市氏「お話の六觀音は實在の姿ですか。」

師「觀音は實在の人間ではないので、菩薩の精神の象徴的表現です。當然あるべき覺醒者の姿です。觀音の生きる生方を生くるとき我等にも觀音の一分がある譯で、即ち

ちそこに觀音は具象的に現はされてゐることになります。現身佛ではないが當然あつて然るべきものとしての菩薩身です。佛教では法報應の三身を説きます。例へば時計の根本原理は法身で、この原理が結晶して時計の種々相たるものが報身で具體性をさし、現實の一個物は應身で肉體的實在的なものを名づけます云々。」

江角氏「では人間がかくく的生活をすべきといふことを示す爲に作られたものなのですか。」

師「作つたとは言へないでせう。時計の原理は人の作り物ではない。物があつて原理があるのでなく、原理が物其物に即して具體化し現はれるのですから。」

江角氏「すると六觀音は人皆を導く方便として示された姿ですね

師「方便と云ふも今云はれて居

る意味では誤られ勝ですが、如來大慈悲の救済力の一示現と云ふべきでせうか。阿彌陀佛は無量と名づくる佛で、光明と壽命の無限を意味します。それが智慧と慈悲との二面の活動相として示されたのが、觀音聖至で、觀音は即ち宇宙の大生命の凡てを生かし給ふ慈悲恩寵の力を示すものと云へます。

然し乍ら歴史的存在でないと思はれぬとする人も世間にはありますが、それは個在觀念に餘りに囚れた考へ方です。個在觀念に執はれず生命觀念に立つのが佛教です。個在の存在價值を活すといふだけでは足りない、その物の眞實生命を生かす、大生命の表れとして貴ぶ立場でありたいものです。云々」

座談は益々妙味を發揮して行つたが、次號に譲ることにする。



筆 隨

奈良田の七不思議

篠原 文雄

甲州奈良田村は天下に有名な夢の仙境である。南アルプスの山懐深い奈良田の神祕を探るべく、私が同村に出かけたのは六年前のことであるが、私自身が甲州の田舎に生まれてゐながら、この夢のやうな仙境に遊んだ折りのことが屢々思ひ出されて、私は奈良田を懐しむ心でいつばいになるのである。

この村は行政上山梨縣南巨摩郡西山村に屬してゐる。富士川の一支流である早川の溪流に沿うて上りつめること約十里、甲斐の白根

の直下、早川の溪谷に開けた東西二町、南北七八町の溪谷に細々と煙を上げてゐる戸數四十三、人口二百三十餘を守る一部落であるが、いちばん近い人里からでも三里餘も離れてゐるといふ邊鄙な山里である。

御維新前までは一郡一村で甲斐國山代郡奈良田村と稱し、武田信玄から「山林畑民戸諸役免許」の御朱印をいたゞき、年貢いらず作りの特別地域とされてゐたのである。

傳説によると、奈良朝の昔、

人皇第四十六代の女帝孝謙天皇、後の承徳天皇が一旦御位を退かれて後、天平寶字元丁酉、御病氣御療養のため此地に御遷居遊ばされ、八ヶ年の春秋をいぶせき此山峽に過ぎせ給うたとの事で、其宮居の跡には女帝をまつる社があり、村人は「奈良王さん」と呼び、毎年舊曆の一月廿五日に盛んな祭りを執り行ふのが行事となつてゐる。

女帝にはこの地が殊のほか御氣に召されて「奈良のやうだ」と仰せられたとのことで、奈良田の名

稱はこゝにはじまつてゐるわけである。宮居は平城京になぞらへて、西に向つて七段の段を設けたといはれ、今なほ明かにその跡を止めてゐる。

女帝が九年目にこの地を去られた時、村長に賜はつたといふ、「難波がたかすまぬなみも霞けりうつるくもるもおぼろ月夜に」といふ御歌は御水草の跡も古めかしく舊染の紺地の袱紗に包まれて、村一番の舊家深澤順吉家に寶藏されてゐる。この袱紗は女帝が御衣の袖をちぎられて包んだものだといふことである。

奈良田の仙境に一步入れば、目にし耳にする風物は全く夢の國とでもいひたいほど、言語風俗、生活様式等が時代離れのしたもので、かりで、私共はそこに遠い我等の先祖の姿と匂ひとをそのまゝ見る

心地がするのである。

私がこの村に最初に出かけたのは九月頃だったが、村では蕎麥の収穫時であつた。背負子に大かますをつけ、陣がさの様な布で作つ

たかさをかぶつて、ぞろぞろと山から下つてくる村人の姿をみると、いかにも悠長で、女の人の目鼻立には畫像に見るものと全く同じやうな、のつべりした天平型が多く、この山中で古繪巻物を見る思ひにうたれたくらゐである。家屋の建物は信州木曾地方に見かける石屋根又は草葺の小ちんまりした荒けづりの堀立小屋で、建物から受ける感じは普通の農家とかはならなかつた。

村人の着物もまことに異様なもので、麻衣の様なだぶだぶしたものを纏つてゐる。まるで肥料のかますを着てゐる様に見えるからお

かしい。この麻衣はタヲといつて、野生のぐどば藤とかからだの繊維を手織にして作つたものである。奇妙なことは、女の人がみんな腰にびくをさげ、幅五寸位の單帶を軽く巻き、その兩端を二尺ばかりもダラリと垂らしてゐること。如何なる理由によるものかしらぬが、とに角、世にも珍しい風情である。

奈良田七不思議の因縁も村の古老にきいた。「この村さあ大昔奈良王様(孝謙天皇)が鳥流しになられて八年間もお住居なさつたちうとでなあ、奈良田七段七不思議のいはれ因縁は御先祖さんからの言傳へで知つて居るだよう」と、古老はいつて七不思議を數へ立ててくれた。一に御符水、二に鹽の池、三に檳榔染池、四に片葉のよし、五に二羽鳥、六に御手洗池、

七に奈良田七段等である。

さて、いはれ因縁であるが、御符水は奈良王さんの側から湧き出る清泉のことで、この清泉は萬病を治すといはれ、村人はたいへん貴重してゐるが、村に病人がなく醫者もゐないのはこの水のためだといふ。鹽の池とは含鹽水のこと

で、村人は鹽の池に集まつて大事にこれを汲んで野菜を煮たり、味噌汁を作るのである。檳榔染池は鐵分を含んだ泉で、茶褐色の染料となり、村人は昔からこれで着物を染めてゐる。御手洗池はまがふ方なき立派なソーダ鐵泉で、主として飲料に用ひてゐる。村の小學校はたつた一校で、西山小學校の分校となつてゐる。校舎とは名のみで農家を改良した粗末なものだ。尋常科六學級合せて児童三十名、勤続二十年といふ男

の小野先生が、その單級全科目を教へてゐる。修身でも唱歌でも體操でも皆一緒に授業をうける。教室も一つだから男女共學といふわけ、正に昭和の寺小屋式の教育で、全國にも數少ない單級學校の模範的のものである。

奈良田では昔から同族結婚で、男女の數がいつも平均し、また未婚の女がかつて妊娠した例がなく、まことに風紀の正しい村といふことができる。村のどの家でも

子供が少なく、二人乃至三人が普通で、四人以上の子供をもつてゐる家は數へるほどしかない。それも道理で、三十過ぎたら子を生まぬ風習がある。特別な産兒制限が行はれてゐるのか、三十過ぎて子を生まぬのは絶無だといふことであるから誠に徹底したものである。

村の産物は麥、粟の類のほか、下駄の表、曲物をはじめ、猪、猿、羚羊、熊、栗鼠、ばんどりなどの毛皮、岩魚、八百魚の串焼なのである。

村人はこれ等の産物と獲物を里へ持ち出して、米や雜貨類をもとめねばならぬが、その多くは先祖代々のしきたりを守つて、昔ながらの物々交換によつてゐる。

村との交易は古來七里の峠を超えた山東の南巨摩郡青柳村の商人との間に行はれてきたもので、村人はあらかじめ日を約束する。日取をきめるには使者がたつのであるが、約束の日に、當番役の村人が下駄の表や獸皮などを背負つてこの峠を下り、丁度三里半ばかり上りつめた俗にいふ池の茶屋とよびなれてゐる六千尺の峠の頂上まで行くのである。また一方青柳村

の方からは三斗俵の米俵や、日常品の數々を背負つて池の茶屋までやつてくるから、使者はこゝで落合ふわけである。

池の茶屋といつても、これは無人の堀立小屋で使ひの兩者は小屋の前の石の上に腰を下して、お互ひの物と物との取引を済ませ、一服しながら世間咄をしたり、別れ際に互ひの健康を祝し合ひ、お互ひに來た道へと荷を代へて引返すのである。

この峠の茶屋の會見は日取りがきめられてあるから、めつたに狂ひはないとのことで、待ちぼうけをくはされるやうなこともないからだ。

時によると、一方だけ峠へ行つても、相手が來ない場合など、相手の名前と品物を書いて荷物諸共小屋の中へ轉がしこんだまゝ、引

きあげてしまふ。さうして翌日また峠に出かけると、品物は代へられてあるから持ち歸るといふことだが、峠の茶屋の取引で品物の紛失したことは一度だつてないさうである。

奈良田は不思議の村であるが、更に奇異の感にうたれるのは、この村の經濟生活と火田民的農耕の方法である。

野良畑は大體その家の人數に比例して、七——八町歩から二十二町歩位耕してゐる。畑は千尺、二千尺の見あぐるばかりの山のひらに開かれた段畑で、稼ぎ者は村から二里も二里半も離れた所まで行つて耕してゐる。

この山畑を作るには、まづ盛夏の候に樹を伐り倒しておいて翌年の四月「火いれ」といつて、これに火をかけて焼きはらひ、そして

焼跡をガジで掘返して何の肥料も
くれずに粟をばら蒔にする。それ
から次の年には蕎麥を蒔き、更に
三年目には小豆を蒔くといふ順
序である。

かくして三度目の收穫を終つた
後には、ここに落葉松や榛木を植
え、それから十七年間は放つてお
くのである。十七年もたてば樹木
も可成り大きくなるから、これを
伐つて材木をとり、その跡を焼い
て灰にして、来るべき三年間の肥
料にする。この方法は朝鮮の火田
民の生活にも似たところがあるの
で興味が深い。なほ山畑には山小
屋が建てゝあつて、種蒔刈入の時
には一家總出で山に移り、半月位
づつ山小屋で暮す習慣になつてゐ
る。

この村には金持のない代りに大
した貧乏人もない。病人がないか

ら家に遊んでゐるものもない。村
人は働くことが心からたのしさう
で、野良に出て働くことが出来な
ければ、おつちんだ方がましだと
いつてゐる。村を愛する奈良田の
人々は、自らの村を離れやうなど
といふ不心得者は一人もゐない。
實際今まで村を出て他國に行つた
ものはなく、それどころか村から
一步も出ないといふ人が多勢ゐる
のも事實である。

村に盗人のあつたためしがな
く、芋がゆを吸りながらも素朴な
村人の生活はかうして続けられて
きたのである。

村の小學校を卒へたものは、上
級學校に進むものもなく、男の子
は家業に、女の子は家庭で裁縫を
習ひ覺える。

この村ではみんな深澤姓を名乗
つてゐる。

S.S.S.

金はンベ 亂賣 金に 優に 合ス エンサる ！を



¥150以上

★ **サ エ ン** ・ 金 萬 年 筆

解答者・中村辨康先生

開基と開山と世代

(問)

説教所を開基なされた者と寺號を公稱するやうになされたものと何れが第一世開山であるか教へて下さい。或人の話に依ると説教所を開いた人が開山であり、寺號公稱はあとのものだから中興位ではないかと云ひましたが、それでよいでせうか。また説教所と云ふものは無住でも「代々」があるものかないものか委細御知らせ願ひます。(〇〇生)

(答)

お寺は元と「山」に開いたので(例へば比叡山とか高野山とか云ふやうに)其開いた方を「開山」と申したものです。後世その例にならつて町の中の御寺でも「山號」と云ふものを付けるやうになり、其お寺の第一世を山の場合と同じやうに「開山」と申すやうになりました。然し場合に依ると其人が師匠の徳をあがめて自分が開いたのではあるが、自分を「開

山第一世」とせず師匠を「開山」とする例もかなり澤山あります。之を「勸請開山」と申します。其場合其實際に開いた人を「開基」と云つてもよいでせう。また僧侶でなく俗人の大檀那があつて或るお坊さんに寺を開かせた時、其大檀那を「開基」と云ひ其を僧を「開山」と云ふ例も澤山あります。即ち寺を開く爲に物質上の力を與へた人を開山と區別して「開基」と云つたのです。然し眞宗では開祖の親鸞上人を「開山上人」又は「御開山さま」と申しますので、其末寺の開山を「開山」とは云はず「開基」と

(問)

善巧方便と云ふ事は何んな事でせうか。最も平易にお説明を願ひます。(城涯生)

善巧方便とは？

(答)

一體「方便」とは「方正便利」と云ふ言葉をつめて云つた熟語で、理想を實現する爲に色々な具體方法を講ずる中で、最も正しく最も能率の上るも

申して居ります。御尋ねの「説教所」ではまだ「寺」ではないから「開山」と云ふ程のこともありません。すまいから、實際に寺にした人を「開山」とし初めに説教所を開設した人を「開基」としてもよいでせうし、また説教所開設の功を稱へて「開山」に勸請してもよろしいでせう。それは功をゆづつたのですから其人は第二世として甘んじて居る譯です。また「代々」と云ふのは「世代」ですから無住ならば有る譯がありません。其跡をついで其處に住んだ人のみが「何代目」かの人になるのです。例へば四代目と五代目との間に數十年乃至數百年の年月がありませうとも事實人が居ないのでから幾ら長い年月がありましても空な世代を無理に造る譯には行きません。常識で御分りでせう。

信 仰 相 談

ののことを「方便」と云つたのですが、それが段々變化して「嘘も方便」と云ふやうにもなり、遂に「嘘」が方便かのやうに思はれるに至りました。然し例へば私達が人へ音信するのに徳川時代には飛脚に頼んだのを現に郵便を使い電信に依り電話を用ゐるやうになつたのは段々方正便利になり方正便利の利用が樂に出来るやうになつたからでせう。かくの如く私達が段々色々な文化的生活を求めて行くのも皆な悉くよりよい「方便」の力を借りやうとして居るからです。かくして最もよいものが「善巧方便」なのですが、一般のものには「善巧」と云ふ文字を使はず、唯だ佛や大菩薩の大智心より發するもののみを「善巧方便」と云ふのです。但し淨土教に於ては如

來の本願を指して「善巧方便」と申しまゝす。と云ふのは通常聖道門では六波羅密などを苦修練行、精進努力して段々菩提を増上せしめ佛果に到達しなければならぬとして居ますが、かゝることの出来ない一般人の爲に如來は大慈悲心を以て念佛と云ふ最も容易なもので然も最後の目的たる佛に到らしめんと本願を立てられたのですから、其「念佛」こそは最もすぐれ最もよく最も巧みな而して最も方正な手段なので「善巧方便」であると云ひ或は「不可思議功德」とも稱讃したのです。また菩薩の「善巧方便」として色々なことが云はれて居りますが、それを申し上げますと却て混雜しますから、是だけで御勘辨願ひます。

往生の者に中陰ありや

(問)

佛教にて中陰てふ語を用ひ且又回向を致しますが如何なる意味にてや、又の淨家の信仰者にも中陰必ずありや、即得往生蓮華化生にも中陰ありや、誠に不明瞭と申して不思議にて御伺ひに及

び御迷惑ながら御教示願度。

(答)

(瀧の川・蓮池方・吉池)
中陰及び回向に就ては前に此欄で度々申し上げたことがありますからそれを御覽下さい。淨土教の信に入

つた者は「一彈指頃」と申して指をはちく程の瞬間に往生すると申してありますから中陰と云ふものは無いと見てよいと思ひます。然し七日七日に中陰中の回向を致しますのは、後に残つた者の務で孝養の爲です。から何回なさつても差支へありません。無上菩提をいやが上にも増上して貰ふことは結構な事で、その念願から追善するのは遺族としての義務でもあり責任でもある譯です。ちつとも不思議な事ではありません。善事は何んなに積み重ねてもいいからです。だから中陰の間ばかりでなく百箇日に一層其人の爲に追善し回向する度數を重ねるのです。國防献金とか或は社會公共の爲に寄附するとかも一つの追善回向ですがその讀經や寄附ばかりではありません。精神的に他の人へ親切を盡くすことなども其なき人への追善行の一つとしてなされてもよい事です。



信 仰 へ の 捷 徑

—— 日常勤行式解説講贊 ——

中 村 辨 康

(五) 略懺悔 (如來の前に我が心の拙さを懺悔す)

我 昔 所 造 諸 惡 業
皆 由 無 始 貪 瞋 痴
從 身 語 意 之 所 生
一 切 我 今 皆 懺 悔

われ昔より造る所の諸々の惡業は、皆な無始の貪瞋痴に由る、

身語意より生ぜし所なり一切我今ま皆な懺悔し奉る。(華嚴經普賢行願品第四十二出ツ)

(意譯)

私が今ま現に色々の苦しみの中に居りますことは自分の惡業の致すところで御座いますが、其惡業は生々世々の大昔から色々造つた所のもので、それは皆な永劫の昔から持つて居る貪慾と瞋恚と愚痴との三毒の煩惱が、私の身體と言葉と意とを通して生ぜしめたところのもので御座います。

私は私の一切の罪過を擧げて今ま悉く心から懺悔いたします。

どうぞ、如來様よ。私の罪過をおゆるし下さいまし。

講 贊

私達は兎角自分の悪い事には氣が付かない。謂ゆる「臭い者身知らず」で、自分の體臭なぞチツトも感じない。他人のだと幾分か感じるけれども、夫も同じ民族である場合感度が、いふて左程の異臭とは思はれないが、人種が異なるとスツカリ臭みの質が

違ふのでイヤな感じさへ起るものである。例へば旅館などで前晩にアイヌ人の寝た蒲團の中にもぐると、臭ひが鼻について寝付られない事さへあると云ふことである。

我國では便所の設備が悪いから臭氣が町の中をたゞよふて居るので、西洋人などは鼻を押へて通らなくては歩かれぬ位であるさうだが、私達には然程には感じないものである。それ程「臭い者身知らず」なのが私達人間なのである。

況して自分の心の悪さ拙さが自分に分りかねるのは寧ろ當然なことかも知れない。随分「身勝手」なものである。

また多少自分で分つて居ることでも何とか彼とか屁理窟をつけて辯護し而して割引きし妥協して、無理に其臭さの感度を摩靡させやうと努めるのも私達の常である。

「どうせ凡夫だから」

「誰彼もして居るから」

「之だけはまた別だ」

かう云つた言葉が何の位、古來から繰返へされたであらうか。

現に私達も今尚ほ毎日繰返へして居るのである。

またかう云ふ人もある。

「私は爪の先ほども悪い事をした覚えはない」

と、だから誠に天下は至極泰平なものである。

だが「地獄にあり」と云ふ淨玻璃の鏡の前に立つたら何うであ

らうか。殺生、偷盜、邪淫、妄語の數々が寫らないで居るだらうか。貪欲、瞋恚、愚痴の醜い姿が寫らないで居るだらうか。

假に現在には人並以上の清き生活をして居るビュリタンであつても、過去の世に何んな事をしたのかも分らず、將來また何うした機縁で悪い事を絶對にしないと確かな證言をすることは出来ないのである。現に生活上の苦しみ、一家親類の間々の苦しみ、健康上の苦しみ、其他色々の重荷や苦痛を脊負はされて居る以上、自分にハッキリした意識がなくなるとも、過去世に於てなした罪過を清算せしめんとする天地自然の力が、かくならしめて居るのであつて、自分に覚えがないからと云つて「我清淨なり」と揚言し得る程の資格はない筈である。

法然上人でさへも「十惡の法然房、愚痴の法然房」と云はれたのである。まして凡俗生活をして居る私達のことであつて見れば、善人なりなどと自惚れる所は毛筋程もある筈がないのである。然るに私達は自分を善人なりと思ひ込んで反省しやうともしない。

何と云ふ無耻な淺間しさであらう。

だが今は如來様の前に出たのである。

如來様を勸請し如來様の妙色身と無盡智との御前に我身を漂したのである。耻しさは限りもないが其御照鑑の前には隠すべき何物もないのである。一切合切表面にさらけ出されるからである。

茲に何うしても懺悔せざるを得なくなる。隠したつて匿し切れるものでもなく、第一隠すべき場所もなく匿くせば匿くす程却て苦しさを増すのみである。だから嫌でも隠でも懺悔せずには居られないのである。

昔し印度では三通りの懺悔法があつた。

第一は四つ辻に出て自分の罪過を告白するもので大衆への懺悔であり、第二は有縁の人々の前での懺悔であり、第三は長老への懺悔であるが、それが段々儀式化し色々な種類を生じたのである。制教懺、化教懺、或は事懺、理懺、或は廣略要、上中下、念時日等の懺悔などで、作法や文句なども段々形式化して行き、實際の罪過の告白も本尊に對しての心懺悔とか或は、告白さへせざる觀相懺悔、無生懺悔などさへ生じたのである。

それは然し人情の然らしむるところで、蓋し止むを得ない事かも知れない。昔しは人心が大様で借金にさへ「萬一返済せざる時はお笑ひ下さるべく候」と書いてあつた位で非常に耻を重んじ名聞を重んじたのであるが、其半面にそれだけに其罪は許され、社會大衆も其時限りで忘れて呉れたのである。然るに段々世智辛くなるにつれ、そんな事では社會も相手も許しては呉れず何處までも追求し一生涯の汚點として惡み嫌ひそして葬り去らずには置かないであらうから、其人はそれ以來もう税があがらず、いくら優秀な素質があつても永久に虐げられ本當にのびずに萎ん

で仕舞はねばならないのである。

またもう一つには世が降るにつれて道德的觀念の腐蝕に依り社會的な耻などよりも經濟的に得をした方がよいと考へ、何でも彼でも損得の利益一點張で片付けやうとするものも出來て來たから公開的懺悔と云ふものの價值が少い場合も數多ある爲に、告白懺悔は愈々以て實際の効用を失ふに至り、遂に其告白内容も一般的な誰にでも通ずるものにした方が却ててよいことになつてしまつたのである。

だから今ま私達が日常の勤行をなすに當つて、此略懺悔の文を讀んでも、若し其處に本當に心から道を求める熱意が湧き上つて居ない場合には、上の空で素通りして仕舞ふことにもなる。

然しそれでは讀んでも讀んだにならず、また實際に懺悔をして居ない譯である。隨て信仰も延びず、如來様への「南無」の心も出て來ない譯である。

今まで折角身と心の清からんことを望み、三寶を敬禮し、心の本尊をお迎へし、如來の妙色身妙智力を讃嘆して來たのだから、此懺悔がよし其文句は一般的なものであるとしても、是非如來の御前に自分の醜い姿を反省し、心から我が貪瞋痴三毒の煩悩に依つてスツカリ塗り固められた罪深い自分をかへり見て涙の中に懺悔し、如來の御光に依て洗ひ清められんことを念願したいものである。

佛教では私達には三種の罪過があり、それが信仰への障となつて居ると云つて居る。

第一は「罪障」である。罪障とは現に犯しつゝある罪過である。自分では罪を犯して居ないつもりでも中々罪を犯して居るのである。先づ父母に對して考へて見るとどんなに大きな心配をかけて居るか分らないのである。生れてから随分なげき悲しみをかけて居る。その山海の鴻恩に對して恰かも當り前の如くに思つて孝養の萬分の一を報じやうともしない私達である。

次ぎには社會や友人知己に對して色々な迷惑をかけて居り乍ら手前勝手身勝手の然らしむるところか、夫に氣も付かずまた感謝しやうともしない私達である。

其他事に觸れ縁に隨つて或は憎み或は怨み或は嫉み或は惜み或は望み或は奪ひ或は虐げ或は偽りなどして何の位罪を重ねて來て居るか分らない。

「水の滴り微なりと雖も漸く大器に滿つ」

で微罪と雖もやがて大罪となるのであるが、私達は氣付かず精神的にも實際上にも十惡の限りを盡くして犯し且つ重ねて來たのである。だからこそ何かしら懺悔を持つて居るのである。

第二には「業障」である。業障とは前の世になした罪過の障のことである。

だが、それは私達の記憶の中にはない。過去に何んな事をし

たやら全然覚えはないからである。イヤそれどころではない。科學の教ゆるところでは父母の原形質から派生されたものであり造り上げられたものであるから、若しあるとしてもそれは遺傳されたものでしかない筈である。従つて遺傳されたからと云つて前の責任までを背負されるのは誠に迷惑千萬な事とも云へる。だから「業障」など云ふことは丸で問題にならないと考へたいところである。

併し乍らかゝる見方は個人主義の然らしむる結果で正しい健全な理解とは云へない。元來「科學」は堅の關係だけを取り扱つたもので、横の關係は問題の外に置き周圍の變化に依て刻々に變化し行く事物を暫く個在的な無變化の立場に立たせてこれを研究するのであるから、其結果として人々を個在觀念の持主たらしめ個人主義的思想の信奉者とならしめて居るのである。

然るに現象の事實は凡て推移であり變化であつて一つとして固定して居るものはないのである。礦物などは其變化が比較的緩慢であるから宛かも固定して居るかの如く見えるけれども、何億年と云ふ長年月を一單位とすれば、其集散離合の變化は極めてあざやかだと云へやう。要は比較上の問題に過ぎない。殊に人生の問題になると實に複雑を極めて中々簡單には片付けられないものである。個人的罪惡でも事實は社會的團體的民族的關係を持つて居るのである。野菜の一かけらの中に誰が我々の祖先の血や肉が籠

められて居ないと云ひ得るだらうか。私達祖先の血や肉は私達の住む大地の中に浸み込んで居るのである。祖先の吐いた息は大空の中に融け込んで居るのである。だから其大地の中から生ひ出で大空の中の氣を吸つた米や野菜に民族的な或云ひ知れない特性が含まれて居ない筈はないのである。

此故に私達の中には單に父母の遺傳ばかりでなく、さう云ふ外部から攝取する食物からも空氣からも過去の色々なものが傳へられ與へられて居るのである。

況して精神的影響、思想的影響に至つては、過去のものをスツカリ受取つて居るのであるから、善惡共に遺傳されて思想し行動しつゝあるのが私達である。

かうした常識的な單純な推理だけでも、私達自らに覺えがなぐとも過去の業因が、現在の私達の中に集積されて居る事が分るのであるから、生々世々六道を輪廻し來つた私其ものに色々な罪過が業力となつて私を色々に引きづり廻して居るであらうことも想像されてよいと思ふのである。

だから自分の認識にないからと云つてそれを否定し去ることは出来ない。私達の認識と云ふものは極めて不完全だからである。いやらしい毛蟲と美しい蝶とが同じだとは何うしても思へない幼兒の認識と五十歩百歩の差に過ぎないのが私達の認識である。「過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ。未來の果を知らん

と欲せば現在の因を見よ」

と云ふ言葉がある。私達は自分の一生さへ自分には本當の事が分らないのである。唯だ現在の事實を見て前世の事を推定し未來の事を推定するだけである。

第三には「煩惱障」である。煩惱と云ふものも結局は私達人間の「本能」に歸着する。本能に依て左右されつゝある私達は過去世に於ても現在世に於ても罪を造りつゝあつたのであり、あるのである。業障も罪障も畢竟「煩惱」あるが故である。然かも煩惱なしには生きて行けない憐むべき悲しい人生である。

然れば此の罪と業と煩惱との三つは私達人間に取つて全く惱みであり障りである。佛道を精進しやうとして、古來から幾千幾萬の求道者達が惱み續けて來たであらうか。そして私達もまたその人達と同じやうに惱みつゞけなくてはならないのであらうか。いや其處には「懺悔」と云ふ清白法が與へられて居る。

善導大師は念佛三昧を完成するのに、黑障、黄障、白障の三障あることを云つて居るが、黑障は罪障であり黄障は業障であり白障は煩惱障である。然しそれは懺悔に依て消え去るものと云つて居る。

恰度親が子供の改悔に依て子供の罪を許すやうに、私達の懺悔に依て如來の大悲力は私達の三障を消散消滅して下さる。

親の慈悲は實は子供の罪を許すも許さぬもないのである。寧ろ

悪い子供程、親の悲みは増すのである。愈々益々慈悲心はつづつて其子を悲しむのである。然しその悲しみはよくしたいと思ふ念願に添つて呉れないからこそあるのである。随てよくなつて呉れたらそれで安心されるし、またそれをスタートとして愈々益々よくなつて呉れることを期待して居るのである。

私達に對する如來様の大慈悲もそれと同じである。イヤ親の慈悲よりもモット強くモット正しくモット深いものである。親の慈悲は親縁近縁の二縁を以てするが、業力煩惱力までを淨化するだけの増上縁力を有して居ない。然るに如來は親縁近縁増上縁の三力を以て常恆に私達を攝取して居て下さるのである。

だから私達としては其大慈悲に應同して行かなくては、本當の人にはなれない。親への孝も君への忠も此の心あつて初めて純粹な強いものになれるであらう。

けれどもその應同と云ふことも、言葉では造作もないが生活の事實になると中々難かしい事で、事毎に喰ひ違ひが出来て来る。

其處で己が煩惱や業の力の根強さをシミジミと痛感し、自然懺悔の心が油然而として湧きあがつて来る。是れ「捨邪歸正」の眞心である。

随つて涙もろくなり何時もシカメ面をして謂ゆる「一くねりくねりたる姿」にもなるのである。

私は或信仰深い方から

「前に壁がある。懺悔の涙で其壁をとかしてしまへ。それでもまだ障子がある。更に懺悔の涙で其障子の紙をとかしてしまへ。それでもまだ雨戸がある。だから更に更に懺悔の涙で其雨戸までをも流してしまへ」と云はれたことがある。其時はさほどにも思はなかつたが、それから、數ヶ月後になつて其時蔭かれた心が湧き起り毎日涙の中に泣き暮したのであつた。今でもベタ／＼とシミのある涙のお袈裟が残つて居る。私に取つては一つのなつかしい筐でもあるし、また思ひ出の深い記念でもある。

淨土教に於ける三心の中の深心に「信機信法」と云ふのがあるが、其信機（自己反省）こそは此懺悔に依て生ずる心である。そして此信機のあとに起るものが入信の歡喜で、金でも名譽でも買へない清淨無垢の喜びである。

それは全く懺悔に依つてのみ獲得し得る心狀である。しかも懺悔は如來の慈光に照らされなければ起きるものではない。如來の前にひれ伏し如來の前に額いて如來を瞻仰するところ、其處に拙ない自分のはじめな姿がさらけ出され、そして信への扉が開かれるのである。私達は今其懺悔をしたのである。無始の昔から身口意の三業のなすところ、皆な苦界沈淪の妄業であるが、それを今懺悔懺悔清淨の水に依て洗ひ清めるのである。

想へば之も如來様の御導きに外ならない。

誠に有り難い極みである。

★三月十五日に

「浄土」読者の會

日比谷松本樓で★

本會も創立以來既に五ヶ年を経過し、會員數も逐日増加しつゝある状況であります。これ一重に愛讀者並びに後援者諸士の熱心な御後援の賜と大法のため感激に、耐えない次第であります。

これ等の情勢に鑑みまして、本部では兼ねがね會員相互の親睦の會を持つて、忌憚無き意見を交換し、信仰の一層の培養を兼ねて本會議進の一助といたしたいと考へておりました處、最近會員の方々よりも「讀者の會」を開けと云ふ聲がしきりに起つて参りましたので慇懃「浄土讀者の會」第一回を左記の通りに開くことになりました。

期日 三月十五日午後五時半

場所 東京日比谷公園、松本樓

會費 壹圓五拾錢

尙當日は著名の宗門人、本誌へ御寄稿下さる諸名士も多數參會せられて、晚餐を共にしつゝ信仰談、佛教談、本會本誌への注文など打ち解けて話し合つて頂くことになつております。奮つて御參會下さい。

尙、準備の都合がありますので、參會御申込は三月十日迄に本部へハガキにて御通知下さい。

(字解)

惡業——十惡などの罪過である。

無始——何時始まつたともない大昔。

貧瞋痴——むさぼり、いかり、愚痴の三はすべての惡業の根本原因だからである。

身語意——私達人間のなす行爲は身と口と意との外にはないからである。

懺悔——懺は懺摩と云ふ梵語で「忍」の義、即ち人に向つて自分の罪を忍容して下さいと頼む意味である。悔は「悔謝」の義我が罪をくやみわびる意味である。

信仰坐談會案内 (來聴歡迎)

日時 三月五日 (第一日曜) 午後六時ヨリ (第十七回)
三月廿六日 (第四日曜) 午後六時ヨリ (第十八回)

場所 本郷區東片町七八橋本樂榮方 (善容大學院)

(市電白山上下車、電話小石川四九七六)

講話 般若心經講義 (第六回目、第七回目)

講師 中村辨康先生

尙三月十三日より一週間 (彼岸中) 同信の方だけでお別時を営みますから、奮つて御參加下さい。



りよだ友會

日本赤十字病院 高橋

一

拜啓陽春の候と相成りました。

小生今般事變に戦傷内地後送になり、廣島陸軍病院にて貴社發行の淨土拜見しまして、我々の爲に精神教育になると思ひました。今後退院致しましても御送付願ひます。

江南陳中 工藤鐵之助

今次事變も益々擴大して出征以來早くも一ヶ年餘の歳月が流れました。目下我々が久しく宿望してゐた〇〇陥落も時間の問題にて痛快を感じてゐますが、銃後の皆様

の御奮闘と護國の華と散つた幾多の犠牲を忘れてはなりません。

今や戦ひは蒋介石の石ヶ原に迄進展致しております。我らの前途には東洋永遠の平和確立と言ふ大使命が残されてゐますから、聖戰はこれからだと思ひます。我々は意氣を鼓して長期戦に供へてゐる次第です。

最後にこの會戦も多少の日月を要するも御心配無く必勝は天を衝く様な友軍の意氣にても早約束されてゐます事を参考迄に申添えて置きます。

北支源道郎隊 小泉 正夫

皆々様の毎度の御厚志に只管感謝の外はございません。お蔭様に小生も益々元氣旺盛歳餘の膺懲戦に使命貫徹を期して更に頑張る決心でゐます。若き者のみに課せられたこの曠古の事業遂行に

邁進致して居ります。

大陸の到る處は殆ど灰燼に歸し敗戦國のみじめさを痛切に物語つております。

ひるがえつて皆々様銃後の守り堅固さに皇軍齊しく絶讃致し、東亞の永遠の平和到来に一日も早かれと努力致して居ります。

運陽陸軍病院 阿久津峯吉

拜啓、定めし銃後の皆々様は健康で事業に精勵しおる事と推察致します。

貴所發行の淨土を毎月お送り下さいます熱誠な人があり、その爲私の様な無學の兵士でも、神佛の有難さが、少しく分る様になりました。信仰の有難みが日に増す様に病氣も傷も日増しによくなり、近く再び戦線に出られる事もひとへに「淨土」のお蔭と深く感謝致します。尚、東京下谷萬徳寺様が

長き間御慰問下された事お禮申します。

桐木縣 花塚 榮子

私事滿二ヶ年間御誌淨土を拜讀させていたゞきまして有難き神佛の御導きにより毎日光ある日を送らせて頂いております。

此の度の事變に際しまして私の主人は北支に出征九度も戦闘に参加いたし、騎兵隊として常に第一線の危険なる所にありながら神佛の御加護により、微傷だもせず、元氣に働いております事うれしく涙の内に感謝致しております。この有難き御佛の御光を一人でも多く仰ぐ事の出来ます様念願致しております。只今送りました誌代にて淨土一部を名譽の戦傷をなさいました陸海軍病院の勇士の方々に御送りして御慰め下さいませ。

雙葉運動ニユース

前線の本部員より

法然上人續仰會の本部員として活躍され目下は中南支の聖戰下に僧侶兵隊として日頃練へた信仰を體して奮戦を續けておられる辻重光君(組織部員)東慈道(編輯部員)の兩人から本部に元氣なたよりを寄せて來ました。

南支にて 東 慈道

三方山に圍まれた山間の僻地で、谷川が部隊の最も大切な飲料を供給する處で、そのせいか到着した翌日から下痢をしてゐます。然し腹はいたまないで頗る元氣です。山村ですから電燈もありま

せん。夜は從つて早く寝ますが、所謂大陸的氣候で日中は陽が相當に強くシャツ一枚でも汗をかきますが、夜はぐつと冷えます。毛布も寒さをしのぐのに充分でないで、戰友と身體をつけ合つて寒さを防いでゐます。食物はたゞ腹を満すだけの食糧にてうまい御馳走などはとても出來ません。それも各自が料理するので、その味たるや蓋し珍味です。然し戦争ともなれば不自由はもつと増すでせう。どんな苦しみも耐えしのんで國民の期待に副ひたく思ひます。戰火にあらされた市街、道路に横つて

法要の費用を 本會基金に寄附

本郷渡邊義遠師の追孝

本會維持會員東京本郷元町二丁目昌清寺住職渡邊義遠師は兼ねて本會のために維持會費二口を完納せられておるが、今度師の先々代の第五十回忌に當られるので盛大に法要を営まれる筈であつたが時節柄との費用を節約しそれを何か有意義なものに振り向けた方が先

々師の靈も満足せられるであらうと二月十五日は本會及び淨土宗護持會に各三百圓づつを寄附せられた、本會は師の御厚義に感激しこの淨財を將來の活動に當てるべく基金制度を設けてこれを第一回基金として銀行に寄託した。

良忠寺支部例會

横濱市鶴見區良忠寺支部第三回例會は二月六日午後六時より聴衆五十餘名を迎えて盛會、本部より佐藤賢順師出講「現代に生きる法然上人」を説き後に質疑座談があつて九時頃和かに會を閉じた。同支部例會は毎月六日午後六時よ

り同寺に於いて行ひ聴講を歓迎します。勿論無料です。横濱市鶴見區矢向町、良忠寺。

貞恭支部例會

貞恭支部では二月四日芝公園明照會館樓上に於いて山田巖雄師が兒童心理に就いて講じ、後佐藤

ある死體、默然と喜怒哀樂の表情すら失つた残存の支那人等を見ては戦ひに負けてはならないとつくづく感じました。

我が部隊の主目的は残敵征伐です。すから残敵を追つて次々に宿營地を移動して行きます。

上官の人々も皆親切で、殊に前からゐられる上等兵殿などはとても親のやうに色々世話してくれます。ですから頗る愉快にやつてゐます。皆さんも御元氣で。

○
新しい年を迎へて大いにハリキツてゐられるでせう。私も南支へ一步を印して以來早いもので既に五十日にならうとしてゐます。いまだに○○町に舎營して至極平和な毎日を送つてゐますが、何時命令が出て討伐に出動するか判りませんので緊張してゐます。歩兵

砲中隊なので馬がゐりますが私は受持の馬が一頭ゐますので、毎日その手入れで日を暮してゐます。馬は経験がないので弱ることが度々あります。今日は吉本興行のラツキイ・セヴン一行の慰問演藝團が大いに笑はせてくれました。いろいろ銃後の御配慮の程厚く御禮申上ります。

中支にて 辻重光

その後愈々元氣です。昨日やつと目的地に到着致し、最初の敵砲弾を受け一段と心が張り切りました。

途中一ノ瀬少尉に寸暇を得て會ひました。戦場での面會は中々嬉しいものです。彼仲々好い少尉になり愈々元氣です。所員諸賢に宜敷くお傳へ願ひます。先は御一報まで。

賢順師の法話があり午後四時閉會した。同支部例會は毎月第一土曜日午後一時より芝公園明照會館に於いて行ふ。婦人方に限られた會であるが既婚未婚を問はず奮つて御參會下さい。

小樽淨友會

歡喜光裡に聖職下第三回の新しき春を緊張のうちに迎ふ。
一月廿五日、宗祖御忌を催し、支部書院に於て衆餐會を催す會費金五十錢。恒例餘興、白隠禪師御作、阿呆陀羅經(道樂坊)吉祥天。福引は廢し純茶話會に終始した。

一、勤行、阿彌陀經、佛身觀、發願文、二、聖壽萬安祈願。三、燒香。四、代表者挨拶及び會務、會計報告、五、議案、閉會。
茶話會に入る。
最後に十方方法界の同心各位の不

斷光中益々榮へあらん事を祈念し合家十念。下山。
雪のうちに佛の御名を唱ればつもれる罪もやがて消えぬる

寄附者芳名(略稱)

- | | | | |
|-----|----------|-----|-------|
| 三 | 房州 | 和田 | 正系 |
| 一 | 鹿兒島 | 寺島 | 景介 |
| 一 | 兵庫播磨西組 | 願入 | 寺 |
| 一 | 福岡岐對組 | 修 | 善庵 |
| 一 | 愛媛越智郡岩城村 | 井上 | 顯章 |
| 二十五 | 神奈川教區中郡組 | 寺院 | 一同 |
| 二 | 伊勢松坂町 | 故奥田 | 光雄 |
| 一 | 廣島市 | 澤 | 榮一 |
| 一 | 東京市 | 小平 | 政吉 |
| 一 | 鹿兒島市 | 小山 | まつ |
| 一 | 山元 | とめ | |
| 一 | 小橋 | 麟瑞 | |
| 三 | 愛知新川町 | 松枝 | 戒應 |
| 一 | 福岡粕尾組 | 洞 | 清寺 |
| 一 | 小樽市 | 平井 | 善慈 |
| 一 | 秋田縣横手町 | 桃雲 | 寺 |
| 二 | 茨城縣水海道町 | | |
| 一 | 報國寺青年會 | | |
| 一 | 四 | 二十錢 | 京都一條組 |
| 一 | 西向寺 | | |

編輯部だより

◆梅一輪、一輪づゝの暖かさ皇軍は海南島に上陸した。無血上陸の輝かしい戦績は世界戦略史上に不朽の一頁を飾るであらうと同時に、今後の戦局の轉開に重大なる影響を及すであらう。

◆而して戦ひはこれからである。議會では茫大なる豫算を始め幾多の重要件案が國民の總意の下に通過し、更に國民の決意をうながすこと大なるものがある。困苦に耐え得る精神力を鍛錬し平沼首相の所謂總親和を實現するためには眞に日本的な信仰がその基礎とならねばならぬ。佛教徒たるもの愈その責務を自覺すべき時である。

◆故渡邊海旭師の遺稿は愈々今月で終篇であります。讀み來たつて七年前に逝去された師が今日の

時局を既に洞察され、それに對する信仰者の態度にまで論及されてゐる眼には驚くのであります。

◆吉田絃二郎先生が常に變らぬ御厚情を以つて、本誌のために稿をお寄せ下さるのは誠に感謝に耐えません。本月も風邪のために御健康の勝れない中を特に本誌のために御寄稿下さいました。當代隨筆に於て並ぶものなき先生の名筆は常に本誌の價値を一段と高めてゐます。

◆北支から報告のため歸還された北支那教監柴田玄鳳師が本誌に寄せられた一文は支那に於ける今後の宣撫工作の一端を暗示するものとして興味深いと思ひます。

◆中島松二氏が解説された芥澤銈介氏の繪傳は現代にものされた法然上人繪傳として是非共一見する價値のあるもの、藝術と信仰との混然たる融合を見るでありませう。(道)

◆本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は

東京八二一八七番

◆御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◆勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ります。

◆その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で、御願します。

◆本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四年二月三十日印刷納本
昭和四年三月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人信仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料五厘)

一ヶ年 金一圓

會費 (送料不要)

上人が萬人と共に悩み求められた信仰求道の生活を軸としそれを回る時代の種々相を描いて何人にも納得の行くやうに親切丁寧に説かれてある。一讀信仰の眞髓にふれよ！

邪教跋扈し、人心また惑亂するの時、一道の光明燦然として信仰の正道を指し示す。萬人のための宗教、浄土教の信仰を説くこの書こそ現代人が信仰の書。

信仰の珠玉凝つて一卷をなす。浩瀚なる上人御遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句、これぞ生活の根底である。

大毎、東日兩紙に連載し百萬讀者を魅了した當代隨一の宗教文學、高き藝術の香氣と深き信仰の把持、小杉放菴畫伯の氣品高き挿畫と相まつて一大美術品！

我が信仰

四六判二色刷表紙付
定價六錢（送料三錢）
二十部以上一時に購入
の方には一部五錢とす。
法然上人鑢仰會編

— 內容 —

信 念 懺 本 知
仰 佛 悔 願 恩
郁 武 吉 佐 岡
芳 者 田 藤 本
隨 小 絃 春 か
圓 路 二 夫 の
篤 篤 郎 子

この時代の信仰は？ 念佛の眞骨
頂は？ 法然上人は？ 文壇の巨星
が隨筆風に表現された、新鮮な信仰
の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを
點ぜずにはおかない！

この内容、この定価！本書こそ布
教用書の最高峰を行くものである！

發 行 所 · 法 然 上 人 鑽 仰 會

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十四年二月廿日印刷納本 昭和十四年三月一日發行

淨

土 第五卷 第三號

定價金十錢
（送料五厘）
滿鮮臺灣
外地定價金十一錢